春。いつかの雨の匂い

作　吉岡克眞

MOが消えてすぐに車の走行音が左から右へと流れていく。クラクション。

○曲がり角(現在)

照明が街の一角を浮かび上がらせる。夜。ラブホテルの出入口を見張っている男、高山光晴。カメラを構えている。その隣には探偵の蓑下保がいる。

蓑下　みっちゃんさ。
光晴　その呼び名、やめません。
蓑下　どうして？
光晴　言ってみれば蓑下さんもみっちゃんですからね。
蓑下　そうなると、みっちゃんミッチャンってことか。
光晴　ウッチャンナンチャンみたいな言い方やめてください。あと、気になってシャッターチャンス逃しますから。
蓑下　じゃあ、光晴くんさ。っと誰か出てきた！　撮って撮って。

シャッターを切るがターゲットではない。
隣で蓑下が写真のターゲットと出てきたカップルを見比べている。

蓑下　ちげぇし。
光晴　削除。
蓑下　はあ。
光晴　溜息を吐きかけないでもらえますか。
蓑下　(大き目に)はぁ。
光晴　なんの溜息なんですか、それ？
蓑下　いやさ、あいつらこんな昼間からホテルにこもってやりまくりなわけじゃない。わかる？　じゃあ俺たちなにやってんのよ？
光晴　仕事じゃないですかね？　じゃなかったらとんだ暇人だ。
蓑下　デリヘル呼んでいいかな。
光晴　経費で？
蓑下　んなわきゃない。あー、もう。そこいくお姉さん、やらせてもらえませんか！？
光晴　やめろ！
蓑下　(通行人を見送る)今の。見た？
光晴　何がです？

蓑下　ゴミあるいは人の吐瀉物でも見るような眼差しだったよ。
光晴　黙っててもらっていいですか？
蓑下　あ。
光晴　黙れって言ったばっかですよ、俺。…で、なに？
蓑下　いやさいやさ、光晴くんはさ、浮気したことある？
光晴　唐突だなぁ。その質問、ありますとか答えられないですよね。
蓑下　別に奥さんに言わないよ。そこは信用してもらってもいいよ。で、どうなのよ。
光晴　ないですね。別にしたいと思ったことないんで。
蓑下　つまらない人生送ってんなぁ。
光晴　余計なお世話です。
蓑下　カメラ！

誰かがホテルから出てきたようだが、写真と比較して。

蓑下　違うかぁ。似てるんだけどなぁ。…もうこのカップルでいっか。
光晴　よくないでしょ。違うんですよね？
蓑下　違うよ。あー、この辺、痴女とか出ない？
光晴　知りませんよ。
蓑下　じゃあ光晴くん、浮気をしなさい。
光晴　何で。
蓑下　世界拡がるから。それに、浮気してくれたらさ。

蓑下、光晴の反応を見ている。

蓑下　俺が愉快な気持ちになる。
光晴　あんたねぇ。
蓑下　まあ冗談冗談。さてと、冗談はさて置き、女は何でトイレットペーパーの先端を三角に折るんだろうね。
光晴　使いやすいからとか。って今度は何の話ですか？
蓑下　違うね。
光晴　じゃあ、なに？
蓑下　浮気相手に自分の存在を見せつけるためだよ。私ここにいるよって。
光晴　三角がですか？
蓑下　そう。三角が。例えば光晴くんが浮気しているとするよ。
光晴　してませんよ。
蓑下　例えばよ。で、浮気相手がさ、トイレ貸して下さるとか言うわけよ。すると光晴く

んは、「漏らす前にさっさと行きやがれ、このあばずれが」とか言うわけね。

光晴　俺、どういう人格ですか？

蓑下　でさ、浮気相手がトイレに入って用を足してさ、さっと手を伸ばしたトイレットペーパーが、三角に折られているわけよ。その三角がさ主張するわけ。私の存在。ってな。で、浮気相手はさ、トイレットペーパーをからからからって回してさ使ってさ、水に流すわけよ。で、すっきりした気持ちで何をすると思う。

光晴　さぁ。

蓑下　（まるで怪談。勿体つける）トイレットペーパーの先端を、三角に折るんだよ。

光晴　はぁ。

蓑下　私、ここに来たよ、ってな。

間

蓑下　カメラ！

シャッターを切る。蓑下、写真の相手と出てきた男の顔を見比べ、そっと写真をしまう。

蓑下　撤収。

光晴　はい。一応撮った写真、確認します？

蓑下、既に帰り始めている。

蓑下　いいよ。光晴くんの腕は信用してるからね。

言いながら蓑下はけ。照明変化。光晴、そのまま舞台を移動し、高山家の食卓（テーブルとイス）に着く。荷物を脇に置くと、睡魔が襲ってくる。

○高山家（現在）

更に照明変化。オレンジ色の照明が夕方を彷彿とさせる。小さく鴉が鳴く。室内灯は点いていない。あくまで窓の外の夕焼けの光が忍び込んでいる。妻の美佳子はまだ帰宅していない。玄関口で鍵が開く音がした。美佳子入り。光晴、目を覚ます。美佳子、電気を点ける。

美佳子　ただいま。起こしちゃった？　すぐに夕食の準備するからね。

光晴　ああ。

美佳子、エコバッグを食卓、あるいは空いている椅子に置き、一度はけ、再びエプロンを付けて戻ってくる。エコバッグから買ってきたものを取り出して再びはける。光晴は眠そうにその様子を見ている。あくびを噛み殺しながら。再び戻ってくる美佳子。数度の往復。もやしといくつかの野菜？などをバッグから取り出してはけ。

光晴　なぁ。
美佳子　なに？

そう言って出てきた美佳子の手にはもやしのみが握られている。あとは冷蔵庫にしまえたのだろう。

光晴　（なぁとは言ったものの言葉を探る光晴）…君は、幸せか？
美佳子　なによそれ？
光晴　そのままの質問だけど。

美佳子、もやしの袋を見つめる。まるでそこに理想的な回答が書かれているのではと思うぐらいに視線を走らせる。

美佳子　…（少し考えてみるが）あなたはどうなの？
光晴　…（質問を質問で返されてぽろっと出てしまう言葉）なんとなく。なんとなく幸せ…
美佳子　なんとなく幸せ、かぁ。

美佳子、笑う。それは苦笑のような悲しいような呆れているような音として部屋に響き渡る。

光晴　なんとなく幸せだ。

まるでその言葉は自分に、あるいはその場に言い聞かせようとしているかのよう。再び、無視できないほどのけたたましさで鴉が鳴く。近くの電線にでも止まっていたのか。それを聞いて、二人、窓の外（客席方向）に視線を遣る。この間に由香里、赤間は板付き。照明変化。光晴と美佳子はけ。

○事務所（現在）

椅子に座っている今津由香里。そして立ってスケジュールを読み上げているマネージャーの赤間。由香里は携帯をいじっている。

赤間　13時から14時まで取材。15時から16時にバルト9で舞台挨拶。18時～25時で天王洲スタジオでドラマの撮影（と読み上げているとシャッターが切られる音が）え？

由香里、赤間に向けていた携帯をそっと戻して、再び携帯をいじりだす。

由香里　滔々と予定を読み上げるマネージャーを撮ってみた。

赤間　それどうするんですか？

由香里　どうするって？

赤間　消してくださいよ。この前だって泥酔した私の写真インスタに載せましたよね？

由香里　面白いぐらいに酔って寝てたわね。

赤間　社長には怒られるわ、知らない人からは罵られるわ大変だったんですから。

由香里　酔って寝る方が悪い。でしょ？

赤間　今のだって盗撮じゃないですか。犯罪ですよ。

由香里　盗撮じゃないわ。ちゃんと撮られたのわかったでしょ？

赤間　だからって拡散しないでください。これ以上知らない人から非難されたら私、立ち直れないですよ。いくら人の噂も75日だとしても。

由香里　75日。75日で噂が消えるって本気で思ってる？

赤間　人の関心も興味も、そんなに長くは続かないと思いますよ。

由香里　私の知り合いに15年、噂で苦しんだ人がいるわ。

赤間　15年かぁ。15年前なんて私9歳ですよ。由香里さんはその頃もう芸能界にいらしたんですよね？

由香里　そうね。ちょうど15歳だから、子役の仕事が増え始めた頃かな。

赤間　あんまりその当時のこと覚えてないんですけど、時間としては長いですよね、15年。

由香里　長い。そうね。口にすれば一瞬で言えてしまうのね。もしかしたら今も苦しんでいるかもしれないのに。

赤間　え、つまり私ももっと苦しみなさいという話ですか？　勘弁して下さいよ。

由香里　思っている以上に長くなることだってあるわよって話。

赤間　長く。…やっぱインスタの写真消してくれませんか？

由香里、笑っている。それは悪意のある笑いではない。

赤間　由香里さん！

由香里、手近にある雑誌を手に取る。グラビアを飾っている後輩たち。パラパラと捲っている。

由香里　去年はいい風吹いたわよね。

赤間　風邪引いたんですか？　くっそまずい薬持ってきましょうか？

由香里　風が吹いたって言ったの。ＣＭ女王も取らせてもらったし。朝ドラも出させてもらったし。

赤間　私も社長も寝る間を惜しんでがんばりました。

由香里　でもこうやって若い子たちはどんどん出てくる。この子なんて最近ＣＭでもよく見るし。

赤間　そうですね。あ、でも大丈夫ですよ。

由香里　何が？

赤間　１０代と３０代では狙う仕事違いますから。お肌の張りだって違いますから。

にこっと健全で無垢な笑みを浮かべている赤間。

間。

由香里　Twitterで拡散しよっと。

赤間　なんでですか！？

由香里　いつまでもいい風吹かせて第一線で働くって難しいわよね。

赤間　それはそうですけど。

由香里　仕事選ばずにがむしゃらこの１５年やってきたわ。

赤間　１５年…（先の話に気付く）…あ。

由香里　なに？

赤間　いえ。

由香里　でも社長やあなたのお陰で漸く最近、私が望んでいる仕事だけをやらせてもらえるようになった。だから二人にはとても感謝しているのよ。

赤間　由香里さん…。私、もっと由香里さんがやりたい仕事取ってきます。今大河ドラマのプロデューサーに会ってくれるよう話してるんです。いい役、必ず取ってみせますから。（だから、…自分はそれ以上に何を言おうとしたんだろうと止まる感覚）

由香里　ありがとう。

赤間　だから、これからも宜しくお願いします。（赤間が言おうとしたのは別の言葉だっ

たかもしれない。もっとネガティブな）

由香里　（笑って）…若いわね、あなた。…

赤間、照明変化とともにはけ。

○由香里の白昼夢（現在）

Mini。由香里にスポット。光晴入り（光の範囲外にいる）。

光晴、シャッターを切る。カメラから顔を離す光晴。

光晴　若いな、君は。

由香里　私が？　そうかしら。

光晴　そう、君が。

由香里　でも今年で私も３０になるわ。

光晴　若いよ。

由香里　ありがとう。貴方も変わらず若いわね。

光晴　それはそうだよ。これは君が見ている夢だからね。ここにいるのは１５年前の俺だ。今の俺じゃない。久しぶりに会いたいな。そしてまた撮らせてよ。

由香里　私を？

光晴　そう。君を。

由香里、小さく声を出して笑う。

由香里　ホントに夢なのね、これ。

光晴　だからそう言ったろう。でもどうして？

由香里　だって、貴方がまた私を撮りたいだなんて。

光晴　ん？

由香里　そんな言葉、言うわけがない。

光晴　なんでそう思う？

間。そして彼女は断定するように口にする。

由香里　貴方は私を恨んでる。

光晴、カメラから顔を上げ、そっとカメラを持つ手を下ろす。

表情までは暗がりの中なので判別しにくい。光晴はけ。赤間、杉宗入り。空いてい

る椅子に座る。M1out。照明戻る。

○事務所(現在)

杉宗、テーブルの雑誌をパラパラと捲っている。

杉宗　(赤間を見て)ハイチュウ食べる？

赤間　いいえ、私は。

杉宗、無言でハイチュウを由香里に勧める。

由香里、無言で断る。

杉宗　そ。おいしいのに。

杉宗、雑誌を手に取ってパラパラと捲っていく。

杉宗　うーん、刺激的だね。この子とか女優で売れそうだ。でもちょっと破廉恥だとは思わないか。だってこれ片乳出てたらもうＡＶじゃない。

赤間　片乳出してる段階で青年誌とか無理ですよ。

杉宗　ぎりぎりのアウトだろこれ。

赤間　出してないからセーフなんです。

杉宗　どう思う？

由香里、雑誌を渡されるも、微笑みを浮かべつつ、そっと雑誌の山の上に置く。杉宗の対応を熟知している。そう、この男、とてもめんどくさいのだ。杉宗、こほんと咳払いをする。

杉宗　赤間から聞いたけど、下から出てくる子たちが怖いんだって？

由香里、ちらっと赤間を見る。

赤間、肩を竦める(気持ちは伴っていない)。

由香里　怖いとは言ってないわ。

杉宗　でも不安には思っている。若さってのはそれだけで武器になることもあるからね。子役から来た君ならわかるだろう。

由香里、答えず。

杉宗　不安だからって辞めないでくれよ。うちの稼ぎ頭は間違いなく君なんだから。この小さな芸能事務所がもっているのも君がいてくれるからだ。この業界で勝ち残り続ける自信がありませんって言って消えていくような子役でも最早ないだろ。

杉宗、話しながらかつて事務所で働いていたミカコを思い出す。思い出して顔が少しほころんでもいい。別に彼女に関しては恨みも何もない。手の焼ける女の子だったなぐらいの。由香里、杉宗のことを見遣る。

由香里　誰のことを言っているの？

杉宗　一般論さ。

由香里　一般論ねぇ。社長。私、今年でいくつになるか知ってる？

杉宗　ん？

由香里　いいから答えて。

杉宗　３０歳、だろ？

由香里　知ってたんだ。

杉宗　所属タレントの年齢ぐらい、ね。何年一緒にいると思ってるんだよ。

由香里　何年。長過ぎて、もう覚えてないわ。

杉宗　悲しいな。楽しい時も、辛い時も二人で乗り越えてきたじゃないか。まだ私が君のマネージャーをやっててさ。

由香里　社長になったらぽいって捨てて。

赤間　その後が私ですね。

杉宗　捨てたなんて人聞きの悪い。いい時期だったと思うよ。１５年。私たちはいい意味で変わっていこうとしているんだよ。

由香里　１５年。

杉宗、雑誌の表紙を読み上げる。（手に取ってもいい）

杉宗　１５歳。私の青春、これからです。

間。

由香里　なんだか少し切なくなるわ。

赤間　社長。ひどいです。

杉宗　え？　いや、あったら読むじゃない。読み上げるじゃない。

赤間　今じゃないでしょ。
由香里　私もね、タレントとして色んなことをやってきたし、毎年カレンダーとかも作ったりしてきたじゃない。
赤間　意外と売れるんですよね。
由香里　(失礼度は)あなたもあなただからね。

赤間、しゅんとしてみせる(気持ちは伴っていない)。

由香里　写真集、子役の時に一冊だけ出させてもらって以来、出してないわよね。
杉宗　そうだな。まあ、その後、出しにくくなったってのもあるけど。
由香里　ごめんなさい。
杉宗　いいよ。うん、もう。
由香里　それで私考えたのよ。このタイミングでどうかなって。
赤間　写真集ですか？

由香里、頷く。杉宗、赤間、見合う。

杉宗　ちょっと待て。

赤間と杉宗、何やら話し合う。
雰囲気だけは由香里に聞こえないようにしているがド頭から声は丸聞こえでいい。
※位置としては由香里を後方にして、前方で客席に向かって芝居をする二人。

杉宗　つまり妥協して買ってくれるファンがどれだけいるかってところじゃないか？
赤間　妥協して買いますか？　あまりにもネガティブな戦略ですよ、社長。
杉宗　供給を引き締めれば。そうだ、そうだよ。つまり絞ってやれば。在庫を抱えることもない。…負け戦になるかもしれないが。
赤間　負け戦って言っちゃった。小さな事務所がやることじゃないですよ。私、無職になるのやですからね。
杉宗　私だってやだよ。私のほうがやだよ。つまりだよ、勝つんだ。なんとしても勝たないとならんのだ、我々は。
赤間　どうやって？　具体的なプランが全然出てないじゃないですか。転職情報誌買ってきます。
杉宗　待て待て待て。あ、買ってきたらあとで見せてね。じゃなくて、由香里を応援してくれる中には色んな人がいるだろう。だから、
赤間　色んな人のことを考えても何も始まりません。ひとまず社長がどうなのかって話を

聞かせてください。
杉宗　俺か。って言われても。正直に言えるか、んなこと。
赤間　逃げるんですか？　逃げていいんですか？
杉宗　君はどうなんだ？
赤間　私は…人生って我慢の連続だなって。
杉宗　君はまだ若い。我慢したところで回復も早かろうよ。
赤間　こういう時に若さとか関係ないじゃないですか。卑怯です、社長！
由香里　いつまでやってるの！　聞こえてきてるんだけど。
赤間　熟女はちょっと黙っててください。
由香里　ちょ、まだ熟女じゃない！

杉宗と赤間、ごにょごにょごにょ。
杉宗が由香里を振り返る。作戦会議は終了だ。

杉宗　（由香里を見て）よし、わかった。出そうじゃないのさ。写真集。
由香里　え、いいの？　アイドルでもないし、熟女とか言われたし。
杉宗　いい。もう俺も我慢して見るから。ヌード写真集。
由香里　違う！
杉宗　え、違う？　違うの？　俺らてっきり写真集＝ヌードって頭だったんだけれど。
赤間　最近胸が垂れてきた気がするとか言ってたのに、なんで脱ぐのかなって私思っちゃいましたもの。
由香里　ちょ、失礼。ほんと貴方失礼。ちゃんと気にして運動とかして…ってもう何言わせるのよ。

間。

杉宗　思い出づくりか？
由香里　そうじゃないわ。強いて言えば、ケジメかな。
杉宗　ケジメ…
由香里　そう。ケジメ。これが私の最後の写真集。タレント業から女優に専念する決意表明。
杉宗　……分かった、作ってみよう。
赤間　カレンダーよりは売れるかもしれないですよね。

由香里に睨まれる赤間。

杉宗　タイトルは、…『女優元年』いや『女優一筋』にするか。

由香里　とてもダサいわ。でも、ありがとう、社長。
杉宗　いいからいいから。早速カメラマンの予定を押さえてしまおう。

そう言って何処かに電話をかけ始める杉宗。
木田入り。電話に出ると照明変化。杉宗、赤間、由香里はけ。
※杉宗は相手が出たという演技を一瞬して下さい。それを照明きっかけとします。

○スタジオ(現在)

木田　ユカイさんの写真集？　ダイアモンドの？　え、由香里さん。はい。あ、わかりました。ひとまずあとで詳細メールで送っておいてもらえます？　はい。どうもです！

電話中に石嶺薫(イシミネカオル)入り。
※石嶺のキャラについて補足。下記のやり取りを読む限り嫉妬や可愛らしさを思い浮かべてしまうが、どちらかというとクールに、でも冷え切った感じや無機質、無味乾燥になりきらないでほしい。

薫　電話、誰？
木田　仕事関係。
薫　女の人？
木田　おっさん。
薫　義朝くんより？
木田　俺より、うーんとおっさん。
薫　そうなんだ。
木田　安心した？
薫　別に。私だけじゃないって知ってるし。
木田　何が？
薫　私彼女じゃないじゃない。
木田　そうだね。
薫　即答。
木田　オブラートに包んだところで事実って変わらないじゃない。違う？
薫　そうかもだけれど、義朝くんは、私より年上なんだから、もっと配慮してくれてもいいと思う。
木田　配慮したら何かいいことあるの？　メリットは？
薫　私がめんどくさい女にならずに済むよ。

木田　それはメリットだなぁ。なるほど。覚えておくよ。でもさ彼女じゃないっていう事実持ち出したのは君の方だからね。
薫　そこを覆すのは男の仕事。
木田　やだよ、めんどくさい。あ、こういうめんどくささがなくなるのか。
薫　そういうこと。じゃあ、もう一度聞くけど、
木田　お。こいこい。
薫　私彼女じゃないじゃない。
木田　そうだね。
薫　そういうところが嫌い。
木田　ごめんごめん。ついね。かわいいからさ。
薫　義朝くん。
木田　ん？
薫　これは忠告なんだけど、思ってもいないことは口にしない。
木田　なんで？
薫　女はね、全部お見通しなのよ。
木田　なに、超能力？
薫　女の勘。
木田　勘かぁ。それは気をつけないといけないね。用心用心と。
薫　で、今度の仕事はどんなの？
木田　まだ詳しいことはわかんないんだけどね。ある女優の最後の写真集を撮影させてもらえるらしい。
薫　それって今津由香里？
木田　なんで？
薫　電話でダイアモンドとか言ってたでしょ。
木田　え、そっちでわかる？
薫　私 IQ 高いから。
木田　へぇ。他に使いみち絶対あるよぉ。
薫　で、どうなの？　当たり？
木田　当たり。まあ、毎年カレンダー撮影してきたし、その流れでのオファーかなぁ。いやぁ、どんなに落ちぶれているタレントでも一緒に仕事しておくといいって話ね、これ。
薫　でも彼女、昔問題起こしたよね。
木田　そういやあったねぇ。
薫　義朝くん、詳しい？
木田　まあ君よりは。だから一度聞いてみたいんだよね。
薫　なにを？

木田　由香里さんはどういう気持ちであんなことしたんですかって？

薫　…義朝くんがその事について嫌悪感を抱いているってのはわかるから、この話はこれでおしまい。

木田　空気読むねぇ、薫。お手。

薫　私、彼女じゃないけどイヌでもないんだよ。

木田　はいはい。おすわり。

薫　やらないから。

木田　つまんないの。だから彼女に出来ないんだよ。

薫　それ今日一番傷ついた。ならさ、義朝くんの彼女ってどんな子？

木田　イヌ、かな。

薫　うそ。

木田　ほんと。ふふ。

薫　やな人。

薫、はけていく。

それを追っていく木田。クルッと回ってよなどといつまでも言っている。

○外、あるいは中。いつかのどこか(過去)

対角線上2か所ぐらいのスポット。何かしらの会話の切れめでユカリ(手前スポット)が言う。

ユカリ　意味わかんない。なにそれ。

対極のスポットにはミカコ。笑っているもののどこか観ている側が切なくなるようなそんな笑い方をする少女だ。↑この笑顔は重要な鍵なので、ミカコ役の役者は是非演技を追求・探求していってほしい。

ミカコ　でもでもでも、ユカリちゃんはいっぱい男の子から告白されるでしょ。どうなのかなって。

ユカリ、スポットの中で動いたり、ポージングしたり、伸びをしたり、何かしら自分の体を動かして誇示したいような感じ。あどけなさ、わざとらしいお道化。ケンケンパとか。ユカリ、スカートを翻してミカコを振り返る。

ユカリ　だからどうなのかなってなに？

ミカコ　なんていうんだろう。好きだって言ってくる人いっぱいいるの私知ってるよ。
ユカリ　うん。
ミカコ　それに手紙やプレゼントとかいっぱいもらってるんだよね。ユカリちゃんと同じ学校に通ってる友達が言ってたわ。
ユカリ　うん。
ミカコ　それなのに誰も選ばないんだよね。
ユカリ　うん。

ユカリ、ここまでは笑顔、そして明るく対応。で、3つ目の「うん」を言い終わった段階で表情を見えないようにしてほしい。客席とは反対方向を向いているなどでいい。

ミカコ　全部、捨ててるんだよね。
ユカリ　(鋭く。強く。温度差意識して)ごめんミカコ。で、何？
ミカコ　恋愛とかしたくならないの？　それだけされて。されるだけなの？　捨てなくてもいいじゃない。
ユカリ　私、もっとテレビドラマや映画にも出たいの。じゃあ、聞くけどさ、一生を捧げてもいいって思えるそんな男が周りにいる？　いた？　いないよね。少し頭使えばわかるよね。社会にも出ていない同級生から告白されても、はい、とか言えないよね。大学に進学した途端ニートになることもあるわよ。あー、もしかして、もしかしてさ、ミカコが好きな誰かが私に告ったとか？　プレゼント渡したとか？　違う？　じゃあ、知り合いから反応探ってくれって言われたとか？
ミカコ　違う。そんなこと、言われてない。
ユカリ　あなただって子役から一緒に頑張ってきたわけでしょ。もっと頑張らないと私たちなんて残れないってことぐらいわかるじゃない。その程度よ、まだまだ私たちなんて。役者なんて星の数ほどはいないけど、残っていけるのは一握りなんだから。こんなところで恋だとか愛だとか、バカバカしい。
ミカコ　じゃあ、ユカリちゃんは恋愛しないんだね。しないんだよね？
ユカリ　当たり前じゃない。そんなことよりも私は私の夢を叶えたい。ミカコ、(温度戻して笑って)ミカコちゃんは恋愛がしたいんだ？
ミカコ　うん。私、したい、結婚。
ユカリ　いきなり飛躍しすぎ。私たちまだ15。そんなの山手線乗ったらニューヨークに着いちゃったぐらいに飛躍してるわよ。
ミカコ　山手線はニューヨークには行かないよ。飛行機乗らないと。まずは成田空港に行って。
ユカリ　わかってるわよ。知ってるわよ。冗談じゃない。

ミカコ　なんだ、冗談か。ビックリした。
ユカリ　私がビックリしたわよ。兎に角、私が言ってあげられるのは、もっとこの業界で生きていきたいなら、恋愛より仕事。
ミカコ　私はユカリちゃんみたいに、残れない、と思う。ユカリちゃんはきっと、もっと素敵な女優さんになっていくと思うのよ。でも、私は。
ユカリ　ミカコちゃんミカコちゃんミカコちゃん。気持ちがあれば大丈夫。ミカコちゃんだって。うん。（考えている間。ここを動きなどで埋めて）……でもやっぱごめん。言えない。私、言えない。あー、なんか元気づけてあげようと思ったんだけど、嘘はつきたくないからさ。ミカコちゃんは、残れないわ。それでも私は前に進むから、一人でも。いくら同期だって言っても、同じ事務所だって言っても、…いつまでも、友情ごっこなんてやってられないから。

ユカリ、はけていく。ミカコ、ユカリのはけた方をじっと見ている目は虚ろだ。ポケットからカロリーメイトを取り出し食べる。その表情から感情は読み取れない。いや、それは感情が多く乗り過ぎて見えないだけか。照明変化。

○学校・ユカリの教室（過去）

真壁夏希、板付き。チャイムが鳴っている。3 時間目の終わりを告げている。SE 教室のようなガヤガヤ。人の声。椅子が床をする音。まさしく学校の音が入り乱れる。ユカリ入り。

ユカリ　（着席しながら鞄を下ろす）間に合ったぁ。
夏希　おはよう。ユカリ。間に合ったってもう 3 時間目終わったよ。
ユカリ　私にしては最善を尽くしてこの時間だからいいの。
夏希　いいよねぇ、この時間から学校って。
ユカリ　何言ってるのよ。朝からずっと仕事だったんだから。羨ましがらないでよ。
夏希　それでも羨ましいよ。隣の席に座っているのが芸能人っていう、何この非日常的な風景。
ユカリ　で、次の時間、何の授業？
夏希　生物。私あの先生嫌いなんだけどぉ。
ユカリ　私もぉ。そんなに授業受けてないけどぉ。（と口調を真似てみる）

お互い顔を見て笑い出す。箸が転んだぐらいでは笑わないが、他愛もない会話で笑う世代である。

夏希　教室移動めんどくさぁ。
ユカリ　うん。
夏希　あ、そうだ。忘れる前に。

夏希、封筒の束を手渡す。

ユカリ　ん？
夏希　いつものファンレター＆ラブレター。いやん、ばかん。
ユカリ　いつもごめんねぇ。じゃ、いつもみたいにお願い。
夏希　あらー、今日もお読みにならない？
ユカリ　読む時間が無駄だもの。
夏希　一通も？
ユカリ　くどいぞ、こら。
夏希　わかったわ。じゃ、処分しときまーす。

ユカリ、教科書とノート一式抱えると、先に教室を出ていこうとする。

ユカリ　ほらぁ。先行っちゃうぞ。捕まえてごらんなさい。
夏希　こら、待て待てぇ。

海辺のカップルデフォルメ版の如き会話。
ユカリはけ。ユカリの笑い声が遠くなってく。
夏希、手元にある封筒を、不意に握り締める。ぐちゃっと曲がる封筒(照明きっかけ)の切なさ。夏希のユカリへの気持ちが現れる。照明変化。夏希もはける。
※照明きっかけに関しては封筒を持つ手に力がこもるところでと思いますが、余程オーバーにやらないとわからなければ稽古の際に検討していきます。

○道の何処か(過去)

光晴入り。光晴、写真を撮っている。暫くするとミカコ入り。光晴、ミカコを気にする。光晴の前をミカコが通過して二、三歩で彼女の写真を撮る。振り返るミカコ。違う方にカメラを構える光晴(コメディのような動きにならないように)。再び歩き出すミカコ。写真を撮る光晴。振り返るミカコ。

ミカコ　あの。
光晴　…

ミカコ　あのぉ！　撮ってますよね？
光晴　撮ってるよ。見ればわかるだろう。
ミカコ　そうじゃなくて。私のこと撮りましたよねって言ってるんです。
光晴　風景だよ。

ミカコ、釈然とせず光晴の様子を見ている。光晴は気にもせずに再び風景の写真を撮り始める。が、その場を去らないミカコに気付き。

光晴　え、なに？
ミカコ　はい？
光晴　まだなにかあるの？
ミカコ　…
光晴　なに、撮られたいの？
ミカコ　そういうわけじゃないです。
光晴　だったら、

光晴、カメラをミカコに向ける。

ミカコ　と、撮らないでください。
光晴　撮らないよ。だからどいて。俺はこの道を撮りたいのよ。誰もいないこの道をさ。
ミカコ　誰もいない道？

ミカコ、振り返り、道の先を見つめる。確かに誰もいない。まるで世界に二人しかいないような感覚。再びシャッターを切る光晴。ミカコ、振り返る。光晴、今度は誤魔化さず、振り返ったミカコを撮る。

ミカコ　あ。
光晴　道にひとり。
ミカコ　なんで撮ったんですか？　あなたが撮りたいのは道の風景なんでしょ？

その質問に答えず、光晴はカーブミラーに映る自分とミカコを撮る。
※舞台にカーブミラーはないので位置を意識すること、ミカコと光晴が同じ方向高さを見ていることを合わせて。

光晴　カーブミラーにふたり。
ミカコ　あの。

光晴　道ってのはさ、誰かがどこかに向かうためにあるんだよ。だから人がいない道ってのは逆に不自然に思えてね。だから撮ってみた。それじゃいけないか？

ミカコ　撮った写真、どうするんですか？

光晴　どうもしないさ。

ミカコ　…だったら、…まあ、いいです。

光晴　そ。

光晴、再びミカコだけを撮る。撮影は慣れているのでポーズを取って笑って見せる。不可解なものを見たというように顔を上げる光晴。

光晴　なにしてんの？　ポーズは取らなくていいし、笑わなくていいから。

ミカコ　あ、はい。

光晴　道に自然に居てみて。ここがどこで、どこからどこに向かおうとしているのかだけを思い描きつつさ。

ミカコ、その辺りにあるガードレールや植え込みや家の玄関やらを眺め、庭先の犬と会話したりしつつ撮影されている。光晴、カメラ越しに話しかける。
※全て舞台上にはないので想像して演技を。

光晴　ところで、君は誰？

ミカコ　あ、私は。

光晴の電話が鳴る。

光晴　ごめん。（電話に出る）はい、高山です。あ、どうも。はい、はい。

ミカコ、その様子をじっと眺めている。照明が徐々に変化。
美佳子入り。ミカコの傍に立って、二人して光晴を見ているがミカコはける。

○高山家（現在）

現在の光晴が電話で話している。仕事の話だ。

光晴　時間は？　はい。夜の？　ああ、ですよね。で、場所は。ええ、ああ、そこなら分かりますよ。また浮気調査ですか？　はぁ。いや、飽きたわけじゃないんですけど。

この間、美佳子は食卓にお皿を載せたりなど、入り、はけを繰り返すが、光晴の電話を全く気に掛けたりはしない。逆に光晴がその無関心を気にし始めて美佳子の気を引こうと大きな声で話し始める。

光晴　え？　あ、そうなんですか？　え、あ、声、大きいですか。すみません。えーと、なんでしたっけ？　浮気、そうそう浮気調査ですよね。春も近いですからねぇ。わざとって、何がですか。ふざけてませんよ。ちっ、…切られた。

食卓に携帯を置いて座る光晴。美佳子、料理皿を持ってきて置く。

美佳子　今日は久しぶりに麻婆茄子にしてみました。温かいうちにどうぞ。

光晴　…いただきます。

美佳子、光晴の前に座り、彼の食事風景を眺めている。

光晴　あの、さ。

美佳子　ん？　なに？

光晴　君は、気にならないの？

美佳子　なにが？

光晴　何がって、…それを俺に、言わせるの？

美佳子　だってわからないもの、言ってくれなきゃ。

光晴　浮気だよ。

美佳子　あなた、浮気してるの？

光晴　違うよ。…聞いてたろ？　浮気調査。カメラマンが、探偵に同行してさ、…浮気してる男か女がさ、ホテルから出てきた瞬間を撮るんだよ。そのカメラマンが俺だよ。男の肩に女が頭凭せ掛けて男が女の腰に手を回して愛を語ってやがるんだよ。今やってきましたって顔してよ。(わかんねぇのかよって顔で美佳子を見る)セックスだよ。

美佳子　わかるよ。あとちょっと声大きい、かも。

光晴　……

美佳子　やりたくないの？

光晴　…

美佳子　やりたくないんだ。でもおかしいよ。私に相談もなくさ、探偵事務所で働くって決めて、今になって嫌だなんて。

光晴　…嫌だとは言ってない。

美佳子　言っているようなものだよ。……私、また働こうか？　それでまた好きな写真だけ

撮っていればいいじゃない。時折ゴシップ誌の写真撮って稼いでくれれば生活は出来るんだから。

光晴　だから、そういうことじゃないだろう。なあ、どうして君は。

美佳子　でも私、感謝しているのよ。貴方がどんなに外で嫌な思いしているとしても、こうやって普通に暮らせている。屋根のある所に暮らせて、お布団で眠れて、こうして

（麻婆茄子を箸で取って[マイム]）麻婆茄子が食べられる。幸せだわ、私。

光晴　幸せ？　そっか。君は。そっかそっか。…

美佳子、光晴に微笑みかけるが光晴はその笑顔を見つめ返すことはできない。うつむきがちに「そっか」と言っている。雨がいつしか降り始めた。ふっと窓の外を見遣る光晴。その動きをなぞるように美佳子も外を見る。

美佳子　雨ね。

美佳子、台所（実際には舞台にはない）を片づけに立ち上がる。暫くして洗い物をしている音。水道の音などが聞こえ始める。美佳子が鼻歌（オリジナルで）を歌いだすがかなり音程がずれずれである。光晴、その後ろ姿を見つめ、食卓の携帯を見つめる。携帯を取り上げ、操作するとレンズを美佳子に向ける。シャッター音。

美佳子（声）　なに？

光晴　（非難の響きは微塵もなく）音痴だよ、君。

美佳子（声）　それ言わない。

見ようによっては微笑ましい夫婦の絵。空気。

暗転。雨音は残り続ける。光晴はけ。

※照明変化でよければ完全暗転しない。

○ファストフード店（過去・放課後）

雨音は少し抑えめに変わっている。店内の騒音。夏希、ユカリ板付き。

窓外を眺めているユカリに対して夏希、どうしたの？という視線を送る。

ユカリ　雨よ。

夏希　ほんとだ。でも大丈夫。今日は傘あるぅ。

夏希、そう言って鞄から折りたたみ傘を取り出してみせる。

それに対してはほとんどスルーのユカリ。恐らく平時からこのユカリスルーを見舞われている夏希。慣れてはいるがイラッとしないわけではない。

ユカリ　困ったなぁ。
夏希　傘ないの？　仕方ないな。入る、駅まで。
ユカリ　どうしようかなぁ。駅まででしょ。
夏希　コンビニで買えばいいでしょ、ビニール傘。
ユカリ　もったいないなぁ。そのお金の使い方は極めてもったいないですよ、夏希さん。
夏希　出ました。変なところで節約思考。
ユカリ　かといって濡れて風邪も引きたくないしなぁ。
夏希　仕方ないな。これ貸してあげる。

夏希、学校カバンからスポーツタオルを出す。

ユカリ　なに？
夏希　こうして、こう。

夏希、そう言いながらタオルを前に広げて出して、頭にかぶる。

夏希　濡れるのは少しよ。
ユカリ　効果ない効果ない。
夏希　何もしないよりは全然濡れないわ。
ユカリ　濡れた体を拭くのがタオル。雨から身を守るのはレインコート。この違いわかる？
夏希　違いが分かる女でしょ、夏希。
　でも、ここには傘が１本とタオルが一枚。あ、これもあるけど使う？

カバンからストロー(包装されている)を取り出す。

ユカリ　ストロー。
夏希　ストロー。コンビニで貰ったけど使わなかったやつ。いつもらったんだっけなぁ。
　(ちょっと考えている間)で、使う？
ユカリ　なにに？　これは何に私は使えばいいのかしら？
夏希　変なことをお聞きになる。ストローはね飲み物を飲むことに主に使われるのよ。
ユカリ　で、この状況でストローが何の役に立ってくれるのかしら？
夏希　天にかざせば雨が止むかもしれない。百歩譲って弱まるかもしれない。
ユカリ　オカルトだわ。…はあ、ホントどうしよっかなぁ。…あ。

夏希　名案、思いついた？
ユカリ　まあ、思いついたには思いついた。
夏希　なになに？
ユカリ　いや、ちょっとね。
夏希　もうなによ、勿体ぶって。
ユカリ　勿体ぶってなんかないわ。ちょっとはちょっとだし。
夏希　そこまで言って言わないとかないわぁ。え、もしかして彼氏？
ユカリ　違う違う。大外れ。
夏希　とか何とか言って実はぁ。
ユカリ　だから、違うって。
夏希　じゃあ。
ユカリ　今朝スタジオで撮影だったの。だから、そのスタジオがこの近くだったなぁって思い出したから。
夏希　ふぅん。傘を借りてこうってこと？
ユカリ　うん。まあ、そういうこと。
夏希　勿体ぶる必要ないじゃない。
ユカリ　うん。まあそうなんだけどね。だって夏希が羨ましがるじゃない。なんでもかんでもさ。
夏希　え、なにそれ。私が悪いの？
ユカリ　悪いとか言ってないわ。ただ気を遣って。
夏希　あ、気を遣われたの、私。

何を言っても空気が悪くなるやり取りってあるよね。と冷静に考えたりするユカリ。

ユカリ　…私、ポテト買ってくる。

立ち上がるユカリ。

ユカリ　何かいる？
夏希　いい。
ユカリ　そ。じゃ、行ってくるね。

ユカリはけ。

夏希　神様。……ポテトを食べたユカリを豚にして下さい。

雨。照明その二人が座っていた座席になって暗転。
夏希はけ。

○スタジオ(過去)

ずっと雨音が続く。光晴入り。
椅子に座っている光晴。テーブルに向かって仕事をしているようだ。
そこに制服姿(セーラーがなければシャツ、スカート、リボン)のユカリ入り。
若干服や髪が濡れているのをハンカチで拭いたりしている。光晴、ユカリに気付く。
※タオルとストローは貸してもらわなかったようだ。

ユカリ　あ。お疲れ様です。
光晴　ああ、今日はお疲れ様。えーと、忘れ物？
ユカリ　あの、傘。
光晴　傘？　ああ。

光晴、外の雨音に耳を澄ませる。

光晴　これ。

ユカリ、頷く。刹那。雷鳴が。

光晴　でかいな。こりゃ止みそうにないね。

※光晴、喋りながらも途中でユカリの変化に気付いて。
光晴、視線を窓からユカリに移すと、しゃがみこんで両耳を押さえている。
光晴、席を立ち、ユカリに近づく。

光晴　大丈夫？
ユカリ　傘。傘あったらお借りしたいんですけど。今度の撮影の時に持ってきますから。
光晴　うん。ちょっと待ってて。

光晴、テーブル脇に置いてあった自分の傘を持って、蹲るユカリに近づく。

光晴　ほら。これ持って行っていいよ。

ユカリ、耳を思い切り塞いで、目を閉じているので聞えないし見えないようだ。

ユカリ　あの、あったらでいいんです。もうなかったらなかったで耳塞いで、目閉じて駆けて帰るので。

光晴　だからさ。あるからね。ここに。傘。傘。

ユカリ　(少し聞こえたのか)朝？　朝までには止みますよね。

光晴　傘。傘だよ。あるよ、あるから。あー、もう。

光晴、ユカリの肩を叩く。目の前に傘を差し出す。

ユカリ、うっすらと目を開ける。

ユカリ　傘。

光晴　傘。これで帰りなさい。返すのはいつでもいいから。

ユカリ　ありがとうございます。

ユカリ、傘を受け取って立ち上がる。そこに雷鳴。そして停電。暗転。

ユカリ　いやぁぁぁぁ。

光晴　大丈夫。すぐ復旧するよ。

ユカリ　ちょ、今触りましたよね。え、何するんですか？

光晴　ち、違う。わざとじゃ。不可抗力だ。

ユカリ　犯される。いやぁぁぁぁ。

ユカリの悲鳴と雷鳴。ドタバタ音は演者各々生で出す。舞台に出ていない演者が幕の後ろから出してもいい。雨は徐々に弱くなっている。暫くして復旧する電気。明転。椅子に座らされてココアを手に落ち着きつつあるユカリ。

光晴　少しは落ち着いてくれたかな。

ユカリ　あ、はい。すみません。取り乱してしまって。

光晴　だからすぐに復旧するって言ったのに。

光晴、他の椅子に座って仕事を始める。

ユカリ、ココアの表面を見つめたまま。

ユカリ　私、鍵っ子だったんです。

光晴、顔をユカリに向ける。

ユカリ　だから夜の遅い時間まで両親が帰ってこないこととかあったりして。

光晴　残業？

ユカリ、頷く。

ユカリ　子供の頃からテレビとかに出させてもらって、両親が帰ってくるまではマネージャーがシッターみたいに一緒にいてくれて。でももうこの年だから。家に帰っても一人なんですよ。えへへ（笑い方は稽古時に要検証）。

光晴、外の雨を見つめる。だいぶ弱くなってきたが…

光晴、ユカリを見て、腕時計を見る。ユカリはまだココアを眺めている。

光晴　別にここにいてもいいよ。何もないけどさ。

ユカリ　え？

光晴　遅くなったら送ってくし。

ユカリ　でも。

遠くの方で雷の音が。

ユカリ、体を固くする。

光晴　ほら。とりあえずココアでも飲んでさ。そのうち、雷ももっと遠くに行ってしまうだろうさ。

ユカリ　ありがとうございます。

光晴、仕事に戻る。

ユカリ、ふうふうとココアを冷まして飲む。

ユカリ　おいしい（と言って笑う）。

色付きのリップクリーム。少し蒸気した頬。盗み見る光晴。特段感情はない。被写体としてぐらいには見ているのかもしれない。照明変化。光晴、ユカリは残ったまま。サイレントで芝居を継続。ユカリは飲む。光晴は仕事をする。

○事務所（現在）＆スタジオ（過去）

由香里入り。椅子に座る。薄暗い状態(完全暗転ではない)。
小さな雷鳴が聞こえる。由香里はもう怯えてはいない。怖くないわけじゃない。人前で怯えたりしないだけ成長したということだ。赤間入り。

赤間　ビル全体停電みたいです。
由香里　すぐ復旧するんでしょ？
赤間　どうでしょう。管理会社に連絡した人が言うには、まあ、ねぇとか。
由香里　…ん？
赤間　え？　あ、その管理会社の人がですね、まあ、ねぇ、って言うんだそうで。
由香里　ごめんなさい。私、バカなのかな。全然わからない。それ、どっち？
赤間　何がですか？
由香里　だから復旧するの、しないの？
赤間　まあ、ねぇ。
由香里　もう一度聞きに行ってきなさいよ。

電気が復旧する。

赤間　復旧、しましたね。停電なんて、珍しくないですか。もしかしたら私、小学生以来かもしれません。
由香里　そんなに？　でも、…懐かしいわね。
赤間　ですよね。
由香里　え？
赤間　いやだから、停電が懐かしいって話を。
由香里　やだ。違うわよ。
赤間　ん？

赤間、何か思いついたようにはけ。由香里、懐かしそうにユカリと仕事をしながら談笑している光晴を見ている。照明変化。２つのスポット。

光晴　普通だな。え、普通すぎやしないか。
ユカリ　だって私、高校生だし。
光晴　学校行って授業受けて、ランチして、帰宅って。
ユカリ　仕事がない日はそんな生活ですよ。あ、あとは友達と(言葉が濁る)。
光晴　どうかした？
ユカリ　ううん。友達と放課後にマックにも行きます。

光晴　ふつー。もっと芸能人らしい生活してるんだと思ったわ。
ユカリ　それはもっと稼いでいる人ですよ。私はまだこれから。

照明変化。ユカリ、光晴の照明がゆっくり落ちていく。赤間入り。代わりに由香里の照明がスポットから切り替わっていく。赤間、紙コップを持っている。

赤間　由香里さん。由香里さん。
由香里　元気、かな。…
赤間　誰がですか？
由香里　え？　何でもないわ。…あ、それ、私に？
赤間　ああ、そうですそうです。どうぞ。
由香里　ありがとう。

由香里、紙コップを手にする。
じっと眺めていて気付く。

由香里　？
赤間　どうかしました？

由香里、一口飲んで。小さく笑う。

由香里　ほんと。……懐かしいわね……

赤間、要領を得ない表情で由香里を見ている。

赤間　車、事務所前に回しておきますね。

赤間、はける。
由香里、ふうふうとココアを冷まして一口飲む。そして名残惜しそうにコップを見つめつつはけていく。

○学校の廊下（過去）

上手下手から入ってくる夏希とユカリ。ばったりと出くわしてこの前の嫌な空気のまま解散してしまったことを思い出す。

ユカリ　おはよう。
夏希　…おはよう。今日は朝から偉いわね。（少しだけ棘がある言い方、になってしまう）
ユカリ　たまにはね。

売り言葉に買い言葉である。どうしたものかとお互い探り合う。

夏希　あ、放課後マック行く？
ユカリ　ごめん。4時間目には学校でないといけないの。
夏希　そうなんだ。
ユカリ　うん。

再び何とも言えない重たい空気が流れてしまう。

ユカリ　じゃあ、またあとで。

と言って立ち去ろうとするユカリに対して。

夏希　……あ、そういえば。
ユカリ　なに？
夏希　今日の3時間目の古文。小テストらしいけど勉強してきた？
ユカリ　え、なに。聞いてない。え、どこ範囲？
夏希　やっぱりね。なっちゃんの虎の巻、借りたい？
ユカリ　借りたい！
夏希　じゃ、今度アップルパイおごりね。
ユカリ　ありがと。えー、聞いてないよ小テスト。

内心ホッとしているユカリ。友達が離れていくことは多々ある。でも夏希とは修復できてよかった。だからこそのテンションに。ふたりはけていく。
※ミカコには見せない素に近い表情を夏希には見せる。その関係性。対等。でも、対等じゃない。

○道の何処か（過去）

ミカコ入り。普通に歩いているが、誰かを捜しているようにも見える。
背伸びをして道の果てに目を遣ってもその誰かは見えない。やきもきする自分の気持ちに苛立ち、否定したい。光晴入り。ミカコに気付き、カメラを構える。た

め息を吐いてしまうミカコのその瞬間シャッターを切る。偶然か？

ミカコ　（はっとした表情で）盗撮！

光晴　悪い悪い。でもあまりにもきれいだったからさ。この風景が。

ミカコ　意地が悪いですね。相変わらず。

光晴　相変わらずってまだ一回しか会ってないよ、君とは。

へそを曲げているフリをするミカコ。出会えたことの嬉しさを戸惑いつつ、隠しつつ、隠せていない。人はそれほど器用ではない。

光晴　では（カバンをがさごそ）、そんな君にはこれを上げよう。

カロリーメイトをカバンから出す光晴。

受け取るミカコ。

ミカコ　なんで？

光晴　若者の体の８割はカロリーメイトで出来ているんだろう？

ミカコ　どこの情報ですか、それ。

光晴　さぁ？

光晴はすぐさまカメラを構えて風景を撮り始める。

ミカコ、何か話さないとと思いながら。以降光晴、気を遣っているのか、でも自然にカメラを撮りながらミカコに声をかける。

光晴　今日はいい天気だな。この前、雷すごかったでしょ、この辺り。

ミカコ　そうですね。…

光晴　あれ、今日はいないか。…いつもこの時間にね、ここに大きな猫がいるんだよ。見なかった？

ミカコ　いえ。…

光晴　そっか。

ミカコ　はい。……あの。えーと、お兄さんは、

光晴　高山。高山光晴。それが俺の名前。

ミカコ　高山さんは、カメラマンなんですか？

光晴　（ミカコに向き直り）そうだな。もし俺がカメラマンじゃなかったら。

ミカコ　はい。

光晴　カメラ持ってこんな平日の真昼間から道を行ったり来たりして写真撮ってさ、どう

思うよ。
ミカコ　変質者かと。
光晴　だろ。
ミカコ　カメラマンなんですよね？

光晴、にやぁと笑って見せる。

ミカコ　え、どっちですか？
光晴　大丈夫。カメラマンだから。
ミカコ　だったらそんな笑い方しなくても。
光晴　からかいたくなるような君がいけないんだよ。
ミカコ　あの。私、君じゃないです。
光晴　ん？
ミカコ　ミカコ。それが私の名前です。
光晴　で、君は…ああ、えーと、ミカコちゃんは何してるのよ。平日の真昼間に。
ミカコ　それは。
光晴　サボりか。
ミカコ　違いますよ。今日は仕事で、その休憩時間にちょっと散歩してたんです。
光晴　仕事？
ミカコ　ま、いいじゃないですか。私のことは。（腕時計を見て）あ、そろそろ休憩終わりなので戻りますね。じゃあまた。

ミカコ、走ってはける。光晴、その後ろ姿を見つめ、静かにカメラを構え直し、シャッターを切る。その一連の光晴の行動は無意識。照明変化。
※舞台上ミカコはもうはけているが、道は一本道。暫くミカコの走っている姿がその道の上にはある。

○カフェ（現在）

夜。窓際に陣取る光晴と探偵の蓑下。SEとして窓外の走行音など町の音。
アイスコーヒーをストローで啜っている光晴。その目はめんどくせぇと語っている。

光晴　めんどくせぇ。
蓑下　まあ、そう言いなさんな。
光晴　だってね、もう3時間もこうしてコーヒー飲んでるわけですよ。腹、たっぷたぷですよ。

蓑下　がぶがぶ飲むからだよ。俺みたいに一時間に一口だけ啜る。それであれば10時間だってここにいられる。いたくはないけどね。
光晴　で、本当に来るんですか？
蓑下　誰が？
光晴　誰が！？　ターゲットでしょう。それ来なかったら俺たちここで何を待ってるんですか？
蓑下　まあまあ、落ち着きなさいよ。コーヒーでも飲んでさ。あ、すみません、コーヒーこちらにお代わりで。
光晴　もう、たっぷたぷですよ。
蓑下　そういう日だってあるさ。
光晴　で、車種は？
蓑下　ちょい待ち。（懐を漁るがメモが出てこない）ないな。
光晴　なにがですか？
蓑下　いや、車種とか書いた紙、確か事務所出た時には持って出たはずだけど。
光晴　自分の記憶が正しければ、シボレー。
蓑下　シトロエン。

※光晴、蓑下同時に車種を言う。

蓑下　ま、とりあえずさ、シボレーかシトロエンが来たら写真撮ってよ。ばっちぐー。
光晴　わかりましたよ。

光晴、再び窓の外を見遣る。そこにやってくる赤いセダンのシトロエン。流れるようにそっとカメラを掴みシャッターを切る。出てくる二人。抱き合ってキスをしている。大胆である。（なお、舞台上には光晴と蓑下しかいない。これは光晴が今見ている景色である。）

光晴　路チュー、ゲット、と。

勝ち誇っている蓑下。

光晴　なんですか？
蓑下　シトロエンだったね。よかったよかった。
光晴　（さらっと無視して）これでひとまず仕事終わりですかね？
蓑下　うん。じゃあ、このカメラは俺が事務所に持って帰るから。

光晴からカメラを受け取って鞄にしまう蓑下。

蓑下　また明日もよろしく。

光晴　あの。

蓑下　ん？

光晴　明日は？

蓑下　もちろん、浮気調査だよ、みっちゃん。

光晴　だから、それやめてくださいって。

満足したように笑い声を残してその場を去る蓑下。

光晴、携帯をテーブル脇に置き、無表情でアイスコーヒーを啜る。カバンから自分のカメラを取り出して、カフェの窓から見える夜景、と言っても人が、車が行き交うそんな景色が広がっているだけだが。

間。

光晴　…世の中、浮気しすぎだろ。

そして深いため息を吐く。照明変化。

○レストラン＆往来(現在)

直前で由香里と杉宗入りで座っている。

黙々と食事を進める二人。

※高山家で使用しているテーブルにテーブルクロスを敷くか、あるいは他テーブルを使うか、そもそもテーブルなしのマイムにするか要検討。

杉宗　先月のレストランよりは雰囲気いいよね、ここ。

由香里　そうかしら。そうね。あそこ、料理は美味しかったのにね。

杉宗　来月、何か希望ある？

由香里　任せるわ。払うの私じゃないし。

杉宗　いや、そうじゃなくってさ。

由香里　社長。私たちってどう見えているのかしら。

杉宗　どうって？

由香里　例えばあそこで自分たちの世界に入り込んでるカップル。彼女たちから見たら、デートみたいに見えているのかしら。

杉宗　さあ、どうかな。兄と妹かもしれないし、まさか父と娘とか。
由香里　事務所の社長と所属タレントとは誰も見ないわよね。
杉宗　どうかな。一応テレビや映画でも露出増えているし。君のことは気づいているんじゃないかな。気づいているから気づかないふりをしているみたいな。…で、来月どうする？
由香里　来月？　食事会やる？
杉宗　何、嫌なの？
由香里　別に嫌ってわけじゃないけど。
杉宗　こうやってプライベートで食事して、抱えている悩みがあれば聞く。それも社長の仕事だと教わったんだよ、俺は。
由香里　来月ね。
杉宗　そう。来月。すぐ来るよ、来月は。
由香里　…考えとくわ。お店。
杉宗　そ。じゃあ、よろしく。

二人してワインを飲み干して一瞬の暗転。
車の走行音。外、往来。食事を済ませた二人。明転。

杉宗　ホントに送らなくていいの？
由香里　ええ。ちょっと飲み過ぎちゃったから、酔い、醒ましてから帰るわ。
杉宗　ちゃんとタクシーに乗れる？　電車はだめだよ。
由香里　大丈夫。まだそこまで酔ってないから。
杉宗　心配だな。
由香里　大丈夫。じゃあ、問題あったら電話するから。ね、それでいいでしょ？
杉宗　わかった。じゃあ、本当に何かあったら、いや、なにかありそうだなって思ったらすぐ、連絡してくれよ。

心配してますオーラを存分にその場に残して杉宗はける。
由香里、笑いながら見送って手を振っている。暫くして手を振ることを止める。

由香里　はぁ。久しぶりに酔ったなぁ。…

由香里、電柱に凭れ掛かり、不図カフェの人を見る。窓際に置いてあるカメラが目に留まる。照明徐々に変化。音も店内の音と外の音が混ざり合う。光晴も片づけを始め、カメラを掴み、立ち上がる。不図気になって窓の外を見る。音が消える。そこには自分を見ている女性(由香里)がいた。一瞬誰だかわからなかった。由香里が

ぺこりと光晴にお辞儀をし、顔を上げると前髪が垂れるので、かき上げて見せる由香里。光晴、ようやく彼女が由香里であることを認識する。音ふたたび戻る。暗転。由香里、光晴はける。

○高山家(現在)

美佳子、入り。パジャマ姿。椅子に座り、膝を抱えながらお盆の上に載っている夕食(光晴の分・ラップがかかっている)をじっと見つめている。携帯が鳴る。暫く携帯を眺めているが、手に取る美佳子。

美佳子　はい。あ、うん。そう。仕事じゃしょうがないわね。でももう少し早く電話欲しかったかな。…いや、いいの。うん、じゃ、先に寝てるね。おやすみ。

美佳子、電話を切り、食卓に置く。置いた携帯を不思議な物でも見るように見つめ、何事もなくお盆を持ってはける。再び戻ってくると手には飲み物(缶)。お酒でもいいかもしれない。それをテーブルに置くと再び携帯電話を取り、ゲームを始める。SEとしてツムツムかパズドラなどのわかりやすいゲーム音が流れる。表情はない。すぐにゲームを終えてテーブルに携帯を置く。そして書棚(舞台上にないことも考えられる)からスクラップブックとゴシップ雑誌やゴシップ誌の類を持ってくる。ハサミとノリは舞台上のどこかに(箱か何かにしまっておき)準備しておいてテーブルに置くと写真を切り貼り始める。

○外、あるいは中。いつかのどこか(過去)

傘を持っているユカリ。そしてミカコ。
※ユカリの傘は光晴に借りた傘である。

ミカコ　今日って雨降るの？
ユカリ　なんで？
ミカコ　傘持ってるから。
ユカリ　降らないわよ。
ミカコ　じゃあ、なんで？
ユカリ　降らないから持ってるの。
ミカコ　矛盾だわ。傘は雨が降るから持つんだから。
ユカリ　いいじゃない。細かいことは。
ミカコ　細かいことじゃないわ。普通のことよ。

ユカリ　なにイライラしちゃってるの？
ミカコ　イライラなんてしてない。
ユカリ　ならいいけど。

ユカリ、眩しそうに空を眺める。どうやら晴天らしい。

ミカコ　ねえ。
ユカリ　なに？
ミカコ　人は人を好きになるのが普通のことよ。好きになったらいけないってのは異常なことじゃない？
ユカリ　え、どうしたの。なに、突然。
ミカコ　この前、ユカリちゃんは恋愛なんてしちゃいけない。今は仕事を選ぶ時って言ったわ。
ユカリ　そうね。
ミカコ　私は、残れないとも言ったわ。
ユカリ　そうね。
ミカコ　だから私は恋愛を選びたい。
ユカリ　あ、そう。好きな人、出来たんだ。

ミカコ、頷く。

ユカリ　え、どういう人なの、その相手って。
ミカコ　年上の人。人をとてもおちょくるの。だけど憎めないの。
ユカリ　へぇ。で、他には？

ミカコ、黙ってしまう。光晴のことをそれほど多くは知らない。なにせまだ2回しか会っていないのだから。しかも道端で。

ユカリ　え、それでそれで？　……もしかしてそれで終わり？

ミカコ、頷くとも頷かないとも微妙な反応。

ユカリ　ほんとにそれってさ。

ミカコ、顔を上げる。ユカリを見る。
美佳子(照明スポット)、顔を上げる。ユカリを見る。

※同時が望ましい。

ユカリ　その人のこと、好きなのかしら？

ミカコ・美佳子　私は。

照明変化。ユカリ、ミカコはけ。

○高山家(現在)

美佳子、スクラップブックを見つめる。劇場の空調の音が聞こえるぐらいに静かだ。刹那、テーブルの上の雑誌類を払いのける。ハサミとかノリとかが飛んでいかないように置く場所を、払い方を注意。美佳子、肩で息をしている。暫くして落ちている雑誌あるいはスクラップブックを拾い集める。空しい。自分がやったことを自分で片づけるこの瞬間。すべてを拾い集め、胸に抱く美佳子。ぎゅっと強く抱きしめる。表情は観客に想像させたい。溶暗。

○スタジオ(現在)

明転。木田が眠たそうに頬杖ついて座っている。

由香里と赤間入り。

赤間　おはようございます。

木田　あ。おはようございます。

由香里　今日から宜しくお願いしますね。今寝てました？

木田　いいえ。ばっちり朝から冴えわたっております。でも早くないですか、時間？　朝からいい写真なんて撮れませんよ。

由香里　ごめんなさい。でもこの時間しか空いてなくて。

木田　困っちゃうな。せっかくの撮影初日。カメラマンだってベストコンディションで行きたいじゃないですか。

赤間　貴方、プロなんだからそういうこと言わないでくださいよ。

木田　プロだってね、人間なんですよ。…俺、汗臭くないですよね？

赤間　いや、知りませんよ、男の体臭なんて。

木田　いや、昨日仕事が終わらなくて、まだシャワー浴びてないから。

由香里　(鼻をつまんで)大丈夫ですよ。我慢します。

木田　いやだ、そんな感じで撮影なんてできませんから。シャワー浴びてきます。

由香里　でも木田さんなんですね、この写真集のカメラマンって。

木田　あらあら。それはどういうことですか？
由香里　いや、木田さんなんだなぁって。
木田　まあ、ぼくは木田ですけど。ご不満ならこの撮影の間は別の名前名乗りますが。
由香里　そういう話じゃないわ。
赤間　大して売れないカレンダーの写真を毎年撮らされて気心知れているだろうって社長が。
由香里　ちょっと待て。大して売れないって今つけたのはあなたよね、マネージャー。
赤間　えーと、どうだったかなぁ。最近物忘れがひどくて。
由香里　待ちなさい。

由香里、赤間を掴まえようと手を伸ばすがするりとかわされてしまう。

由香里　もう！
木田　まあまあ。私としてはとても光栄なんですよ、正直なところ。キャリアのなかった私に声かけてもらってからもう５年。毎年カレンダーの写真を撮らせてもらって、そして最後の写真集、これに関われるんですから。

木田、笑って、少しオーバー気味にリアクションをする。彼の軽薄さみたいなものはそこにあるんだろうなと由香里は見ていて思う。同時に損もしてきただろうと同情すらする。

木田　じゃあ、撮影の前に。

木田、由香里を撮る。

由香里　え？
木田　全ての終わりの始めの一枚。記念の一枚です。
由香里　記念の、ねぇ。

照明変化。赤間、木田はける。

○公園（過去・昨夜）

光晴、入り。

由香里　１５年ぶり、よね。

光晴　そうだな。見違えたよ。全然、わからなかった。
由香里　お世辞がうまくなったわね。
光晴　世渡りは相変わらずうまくないけどな。
由香里　同じく。でもまだ私は役者を続けてる。全部あの時、かばってくれたあなたのお陰。
ありがとう。ずっと、言いたかった。
光晴　よせよ。あれはもとはと言えば俺が、なんていうか考えが甘かったから。
由香里　今もカメラ、続けてるの？

光晴、手元のカメラを握り直す。

光晴　カメラさえあれば、できるからな。君はどうなの？
由香里　テレビ見ない？
光晴　最近はあんまり。
由香里　そう。これでも去年はＣＭ女王とったのよ。
光晴　へえ、すごいな。
由香里　去年と言えばＮＨＫの朝ドラにもレギュラーで出たわ。で、あなたは？
光晴　俺？
由香里　どんな写真を撮ってるの？　さっきもカフェで撮影？
光晴　…ああ。まあな。…カフェの、窓。そう。「カフェの窓から」っていう雑誌の企画
があってさ。
由香里　そうなんだ。え、女性誌とか？
光晴　まあ。
由香里　ごめんなさい、知らなくて。今度調べてみるわ。
光晴　いいよ。大した企画じゃないし。
由香里　でもあなたの今の仕事、知りたいから。
光晴　いや、ほんと。調べたって出てこないからさ。それより俺も、君の出ているもの、
今度見てみるよ。
由香里　ありがとう。あ、連絡先交換しても？
光晴　いいよ。

由香里、光晴、携帯を取り出して交換する。交換しているのはLINEか。

由香里　１５年前はLINEもなかったわね。
光晴　携帯電話だってなかった。
由香里　あったわ。嘘つきね。
光晴　じゃあ。

由香里　待って。
光晴　ん？
由香里　このまま帰っちゃうの？
光晴　え？
由香里　…写真。
光晴　？
由香里　写真撮ってよ。15年ぶりなんだから。
光晴　ああ、そういうこと。わかった。
由香里　今一瞬エッチなこと考えなかった。
光晴　考えてないから。

光晴がカメラの準備をしている間、由香里はどこで撮ってもらおうかと探し歩いている。

由香里　ここがいいわ。
光晴　ああ。じゃあ、そのまま。
由香里　再会を祝して。
光晴　記念の一枚。

シャッターが切られる。
二人、微笑みながらはける。

○スタジオ(現在)

照明変化。由香里は衣装へ着替えにはけている。前のシーンで二人はける直前ぐらいには板付きで木田と赤間。木田はカメラの準備中。赤間を見ずに木田、声をかける。

木田　赤間さんさ、俺、そんなでもないからね。
赤間　何がですか？
木田　だから俺の噂知ってるでしょ？
赤間　まあ、それなりには。
木田　ずっと警戒してるし。
赤間　私がですか？
木田　貴方のほかに誰がいますか？
赤間　すみません。

木田　いや、別に謝ってほしいわけじゃないからさ。
赤間　噂って、仕事で関わった女性をすぐに食べちゃうっていうのですか？　でもあれってあくまで、うわ（さですよね？）

薫入り。

薫　義朝くん。忘れ物。

鍵を見せる。

木田　え、なにそれ。
薫　え、なにそれ、ってひどいなぁ。うちの鍵だよ。合鍵あげるって言ったじゃない。
木田　それが今朝忘れていくってどういうことって思いつつ届けに来てあげたよ。
ああ。そういやそんな話したっけ。

木田、鍵を受け取りながら赤間に軽く紹介する。

木田　薫です。
赤間　どうも。
木田　マネージャーさん。

薫、無遠慮に赤間を見遣る。

薫　あ、今津由香里のマネージャーさん！
木田　薫、由香里さんのことフルネームで呼ぶよねぇ、いつも。
薫　そう？　気づかなかった。以前、テレビの特番だったかな、収録の時にお会いしてますよね？
赤間　えーと。
木田　すっぴんだからわかんないんじゃないの。
薫　え、わかりますよね。
赤間　いやぁ。ごめんなさい。
薫　ショック。義朝くん、この人、失礼な人だよ。すっぴんだからわからないだなんて。
赤間　いや、すっぴんだからとかじゃなくてですね。私、ほんとにお会いしたことあります？
薫　今年ですよあれたしか。まだ2ヶ月も経ってないですよ。
木田　こいつね、朧月夜というバンドのギターなんです。ボーカルよりも歌がうまいって

ネットでちやほやされてるんですよ。聞いたことないんですけど。
赤間　え、あの朧月夜ですか。皆白塗りの。
薫　その朧月夜のギターが私です。
赤間　いや、当てられる人いないですよ。白塗りしてくれないと。しかも金髪じゃないし。
薫　あれはヅラなんですよ。髪傷めちゃうの嫌なんで。
赤間　えーと薫さんは木田さんの彼女さん？
木田・薫　違いますよ。
赤間　その鍵は？
木田　好きな時に来ていいよってこいつが言うので、じゃもらってやるかなって感じです。
赤間　えーと。
薫　そんな感じです。あ、でもポジティブな感じで。
赤間　ポジティブ？
薫　今の義朝くんの言い方だととっても女性蔑視な感じじゃないですか。都合いいように利用されてるよあんたって言いたくなってませんか？　大丈夫ですか？
赤間　その言葉は結構喉元辺りまで来てますけど。
薫　でしょ。だいたいそんな感じなんですけど、そうじゃなくて。私が好きでやってることなんで。
赤間　いやだから結構都合よく利用されてるなぁって思えるんですけど。
薫　本命じゃなくていいので私。
赤間　虚しくなりませんか、それ？
薫　全然。
木田　ね、おかしいでしょ。俺、本命じゃないってずっと言ってるんですよ。2年前に隣人が飼ってた柴犬よりも下だからなって言ってるのにこの好かれよう。どうです？
赤間　言葉もありません。
薫　で、今津由香里さんは？
木田　着替えてるよ。これから撮影だから。だから帰れよそろそろ。鍵貰ったし。
薫　いや、挨拶していこうかなって。
木田　なんでだよ。知らない子から挨拶されても困るだろう。
薫　知らない女じゃないし。ねぇ？
赤間　まぁそうなんですけど、今日は白塗りじゃないから。
薫　じゃあ塗ってきます。
木田　いや帰れよ。ドア開けてあげるから帰れよ。
薫　ドアは1人で開けられます。もしかしていられると困るの？
木田　違うよ。
薫　もしかして義朝くんの本命って…。
木田　だから違うって。俺、熟女とか無理だから。

赤間　あ、それ禁句なんで本人目の前に言ったらだめですよ。
木田　言いませんよ。そんな本人目の前にして言うバカどこにいるんですか？
赤間　ですよねぇ。
薫　怪しくありません？
木田　赤間さんを巻き込むなよ。ねぇ。
赤間　これはなんとも。
薫　煙のないところに人影なし。火のない所に煙は立たぬって言うんだからね。正直に言ったらどう？　私、怒らないし。
木田　正直に言ったら帰ってくれるの？
薫　それは答えを聞いてから決めます。
木田　それずるくない。え、ずるくない。
薫　ずるくありません。そのぐらいしないと男女の平等が保てません。
木田　えーと。

薫、木田の発言に注目する。

木田　恋人が熟女とか考えたくないけど、別に由香里さんのことは好きでも嫌いでもないけど。
薫　けど？
木田　一度抱いておいてもいいなぁとは思う。今からでも抱かせてくれない？
赤間　冗談ですよね？
木田　冗談、俺嫌いだから。
赤間　えーと、そうなると問題発言になりますけど。
木田　冗談の方が問題あるでしょう。
赤間　いやいや。だって「所属タレントに手を出したいんだけれど、マネージャー、何とかならない」っていうような発言をされたんですよ、今。
木田　そうね。無理？　ダメ？　絶対？
薫　ダメに決まってるでしょ！
木田　だから、なんで薫が決めるんだよ。俺、赤間さんに聞いてるんだからさ。
赤間　…本気ですか？
木田　さぁ、どうでしょう。
赤間　え、なんなんですか。
木田　俺はさ、冗談は嫌いだけれど、ちゃらんぽらんなんだよね、発言がさ。
薫　ちゃんとダメだって言わないといけませんよ、マネージャー。

由香里、着替えて戻ってくる。※服装に関しては要検討。

口笛を吹く木田。カメラを構えて撮影をする木田。

由香里　何の話？　あれ、えーと。

薫　お久しぶりです！

由香里　どちらさま？

薫　ショック。やっぱ白塗りしてきます。

薫はけ。

木田　そのまま帰れよ。

由香里　今の人は？

赤間　あ、彼女は。

木田　通りすがりの赤の他人です。じゃ、撮影始めちゃいましょうか。どうぞ。隣のスタジオに。

由香里はけ。木田はける間際に振り返ることなく、

木田　赤間さんさ。さっきのこと、検討しといてよ。ね。

木田、はける。赤間、木田という人間性について思いを馳せつつはける。

○テレビ局・楽屋(過去)

ミカコ、入り。お弁当(空箱でいい)を食べようとする。

ユカリ、慌てて入ってくる。ミカコを捜していたようだ。

ユカリ　ミカコ！　え、なんでさっさと帰ってきてるの？

ミカコ　え、撮影終ったから。

ユカリ　ふざけんじゃないわよ！　あんな演技しておきながらひとりすたこらさっさと楽屋に戻ってくるって、本当にないんだけど。

ミカコ　でも。

ユカリ　でもじゃないわ。貴方だけの問題じゃないのよ。同じ事務所の私にも迷惑をかけることになるってわかってるの？

ミカコ　そんなつもりは。

ユカリ　わかってるわよ。そんなつもりはなかったことぐらい。そんなつもりでやられてたら、たまったものじゃないわ。

ミカコ　えーと、ごめんなさい。
ユカリ　ごめんって、そう思ってるなら手に持っているお弁当をまずは置きなさいよ！

ミカコ、（慌てて）お弁当をテーブルに置く。

ユカリ　杉宗さんからは何も言われないの？　杉宗さん、どこに行ったのよ、こんな時に。
ミカコ　監督にぺこぺこしてたよ。さっき。
ユカリ　ぺこぺこ。…それあなたがNG何度も出すわ、ド下手な演技かますわしたからでしょう。それを謝ってたんじゃないの？
ミカコ　どうかな。ちょっと離れていたから聞えなかったわ。
ユカリ　あなたねぇ。……いい、ミカコ。今日はとことん言わせてもらうけれど、

照明、ミカコスポット。ユカリはサイレントで何かを捲し立てている。

ミカコ　ねえ、ユカリちゃん。私にはユカリちゃんみたいにはうまくやれないし、うまくなれないの。私の為に言ってくれていることも多いけれど、それって結局は自分のことなんだよね。わかるよ、ユカリちゃん、そういう子だもんね。とてもありがたいんだけれど。話はとてもありがたいんだけれど、……ありがたくないな。

照明戻り。

ユカリ　ねえ、聞いてるの、ミカコ！
ミカコ　聞いてるよ。
ユカリ　で、どうなの。わかったの？
ミカコ　ねえ、ユカリちゃん。
ユカリ　なに？
ミカコ　もういいかな。お弁当食べるから。
ユカリ　え？　ちょ、ミカコ。…
ミカコ　うん。私、お弁当食べるからさ。

ユカリ、かける言葉を失っていく。言おうとする言葉が刹那刹那空中で溶けて消えて行ってしまうような感覚。狼狽。ちっ。照明変化。ユカリ、ミカコはける。

○スタジオ（現在）

由香里は椅子に座っている。木田、赤間も既にいる状態。

※前シーンの照明変化時点で演技ができるようにスタンバイ。
撮影の合間の休憩。

由香里　ねえ、木田さん。
木田　はい？
由香里　「カフェの窓から」っていう企画、知ってる？
木田　さぁ。俺も詳しくない分野ってのはあるんで。
由香里　そう。

赤間、テーブルに無造作に置かれている雑誌や新聞を眺めている。

赤間　これって木田さんが関わっている雑誌とかですか？
木田　え？　いやいや。趣味？　そういう芸能人のゴシップとか好きでさ。
赤間　嫌な趣味ですね。
木田　それほどでも。
木田・赤間　褒めてない。
木田　わかってるって。こういう雑誌には取り上げられないですよね、由香里さん。
赤間　そこはガードしてますから。

由香里、笑って聞き流したい。その流れだと触れたくない話に触れなくてはいけなくなるそんな気がしたから。

木田　じゃあ、載ったのは15年前ぐらいですか？

由香里、ほら、と胸の中で思う。

由香里　そうね。それ以来はご無沙汰かしら。
木田　まあ、俺もカメラマンだからさ、どっちの味方するかっていうとカメラマンの味方になっちゃうわけ。
赤間　あの、その話は。ね。
木田　いや、だってさ、今回の写真集の話ってあれでしょう。ケジメみたいな、禊みたいな。ねぇ？　違った？
由香里　そうね。
木田　当たった。でさ、あれでカメラマン一人、路頭に迷わせたわけじゃない？　その時の気持ちってどうだったのかな？
由香里　…申し訳ないって気持ちで(いっぱい)。

木田　え？　なに？　もしかして、今、申し訳ないなんて言葉を口にしたの？　申し訳ない。そんなんでいいの？　え、（赤間に）いいんですか？

由香里　申し訳ないじゃ済まないぐらいわかってるわ、私にだって。でも、じゃあ、あの時、どうすればよかったの？

木田　知らないよ。だって俺は君じゃないんだもの。君が考えろよ、可能であれば15年前の君がもっとちゃんと考えろよ。

由香里　無茶言わないで。

赤間　あの、ホントにこれぐらいで。

木田　そうやって甘やかすからいけないんじゃないかな。いや、俺はさこの15年君が苦しんできたってのはわかるのよ。わかるけどさ、それって自己満じゃない？　15年、もういいよね。ってさ君の論理でしょ？

由香里、立ち上がる。

木田　え、逃げるの、この場から？　…プロだろ、君はさ。

由香里、そのまま椅子に座る。

由香里　……何も知らない癖に。

木田　ああ、俺は何も知らない。好き勝手なことを言っている。でも俺が間違ったこと言ったかい？

赤間、そわそわとして二人を見ている。

木田　さて、休憩終わり、と。じゃあスタジオ戻ろうか。

誰も動かない。やれやれと木田。そこに雨音。徐々に大きくなって。

木田　雨か。

暗転。全員はけ。

○公園（過去）

ユカリ、ベンチに座って光晴を待っている。

光晴、入り。手には缶コーヒーとココア。

光晴　おつかれ。どっち？

光晴、二つの缶をユカリに見せて選ばせる。

ユカリ　じゃあ(ココアを選ぶ)。頂きます。
光晴　どうぞ。

ユカリ、猫舌なのか、缶に向かってふうふうとやっているが恐らく効果はないだろう。

光晴　写真集って初めてなんだっけ？
ユカリ　ええ。でもなんだか難しいですね。動かずに表現するとか。
光晴　いや、やれてるよ。いい写真がたくさん撮れた。
ユカリ　そうですか？　それは高山さんの腕ってところですかね。
光晴　褒めない褒めない。
ユカリ　ホントですよ。私、高山さんの写真好きですもの、あの、風景とか。もっと今度見せてくださいよ。
光晴　わかった。今度ね。
ユカリ　で、褒めたからってわけじゃないんですけど、私の宣材写真、撮ってくれませんか？
光晴　え、なにそれ。これだからなぁ。ないんだっけ？
ユカリ　ありますよ。でも。…高山さんに撮ってもらいたいって思って。
光晴　考えとくよ。この仕事終わったらすぐフランスに行かないといけなくて。
ユカリ　フランス？　お仕事ですか？
光晴　そ。なんか芸術家気取りのおっさんたちの写真を撮ってくれって頼まれてて。
ユカリ　お気をつけて。
光晴　まだ行かないから。…ま、撮るなら早い方がいいか。今度の撮影の日にでも？
ユカリ　ホントに？

光晴、頷く。

ユカリ　やったぁ。約束ですよ。
光晴　約束。
ユカリ　私、約束破ったら本気でハリセンボン飲ませますからね。
光晴　ん？　ハリセンボン？　針千本？
ユカリ　どっちだって飲ませますから。

光晴　ああ、わかったわかった。…君は若いな。
ユカリ　高校生ですもの。
光晴　心が若いのかな。羨ましいよ。まだ何でもできる。

ユカリ、楽しそうにしていたのが徐々に陰っていく。一気に変化する必要はない。

ユカリ　なんでも、できますか？
光晴　ああ。できるさ。
ユカリ　私はそれに関してはどうだろうって思ってしまいます。将来に不安しかないです。
光晴　またまた。
ユカリ　本当ですよ。だって若いだけで生き残れないじゃないですか、この業界。
光晴　それは分かるけど。

光晴の脳裏に消えていったタレントの顔なのか名前が浮かんでいた。

ユカリ　私だって女優になりたい！　って言ってこの世界に入ってきたけれど、絶対的に今の実力じゃ敵わない、そんな人もいて。だから、中途半端にやっている人が許せなくて。自分の未熟さにもイライラして。

光晴、黙って聞いている。時折コーヒーを啜る。

ユカリ　私、若いって言われたくないです。
光晴　ごめん。
ユカリ　…あ、私もすみません。…
光晴　人知れず苦しんでるんだな、君も。
ユカリ　年相応に。はは。

ユカリ、誤魔化すようにココアにふうふうとやっている。
光晴、ポケットに入っていたカメラを取り出して、構える。彼女は気づかない。
シャッターが切られる。

ユカリ　え？

シャッターを切る。

ユカリ　あの。

光晴　いいから。黙って。

※ユカリ、撮影されながら自分の心に触れて、困惑する。「どうしよう、私」
夜の公園にはシャッター音だけが響いていた。
撮影をしながら光晴はける。照明変化。

○外、あるいは中。いつかのどこか(過去)

ユカリ、ぼうっとしている。ミカコ入り。

ミカコ　おはよう。

ユカリ、黙ったまま。
ミカコ、ユカリの隣に座って心配そうにユカリを見ている。

ユカリ　ねえ、ミカコ。
ミカコ　なに？
ユカリ　恋愛は御法度よね。
ミカコ　え？
ユカリ　御法度って破ったらそれ相応の罰があると思うのよ。
ミカコ　私まだ破ってないわ。(声小さくなり)時間の問題とは思うけれど。
ユカリ　私、どうしたらいいのかしら。わからなくなってしまったわ。
ミカコ　え？　ユカリちゃんの話？

ユカリ、頷く。

ミカコ　え。ユカリちゃんが恋愛？　そういうこと？
ユカリ　大きな声で言わないでよ。
ミカコ　だってあのユカリちゃんがどうして。
ユカリ　笑いたければ笑っていいわ。
ミカコ　ううん。笑ったりなんかしない。え、誰？　私の知っている人？　まさかマネージャー？
ユカリ　違う違う。全然、多分ミカコちゃんは知らない人よ。
ミカコ　えー、気になる気になるわ。教えてよ、誰なの？
ユカリ　言えない言わない。
ミカコ　勿体ぶらないでよ。二人だけの秘密にするもの私。

ユカリ　ダメよ、絶対ダメ。

頑なに秘密にするユカリを見ているミカコの表情はとても笑顔。

ミカコ　そっかぁ。ああ、そうなんだぁ。ユカリちゃんが恋愛したんだぁ。
ユカリ　ごめんね、今まで散々なこと言って。
ミカコ　別にそれはいいのよ。はぁ、でもなぁ。
ユカリ　なに？
ミカコ　いや、うん。なんかね、ちょっとね。やだなって。
ユカリ　え？　やだなって、応援してよ。
ミカコ　いやよ。
ユカリ　なんで？
ミカコ　だって、それじゃユカリちゃんが普通の女の子になっちゃう。そんなの我慢できないわ私。うん。我慢できそうにない。
ユカリ　ミカコ…？

照明変化。ミカコ、ユカリはけ。

○事務所(現在)

由香里、杉宗がいる。

由香里　ね、社長。
杉宗　なに？
由香里　15年じゃ足りなかったかしら？
杉宗　え？
由香里　私は、高山さんの人生壊しちゃったから。
杉宗　由香里。
由香里　ねえ。社長はどう思う。
杉宗　あのさ、由香里はこの15年何をしてきた？
由香里　バンジーやったり落とし穴に落ちたり。
杉宗　他には？
由香里　墨汁かぶったり、うなぎの入った水槽に入れられたり。
杉宗　そんなのもあったな。女優志望の君に色んな仕事をさせた。
由香里　そうまでして業界に残りたいのかって言われたこともあったわね。
杉宗　ようやくだよ。バラエティの仕事を減らして女優の仕事を増やしてもSNSで叩かれ

ることもなくなってきた。

由香里　それでも噛み付いてくる人はいるけどね。

杉宗　赤間から報告は受けてるよ。木田に散々言われたんだって？

由香里　まあ、ね。私の15年で彼が許してくれるのかなって。

杉宗　それは彼に聞かないと、いや、聞いたからと言ってそれが真実とも言えないか。しかし、君はこの15年、彼が失ったものと同等の滅ぼしはしてきたんじゃないかな。

由香里　優しいのね。

杉宗　俺はいつだって優しいさ。

由香里　ありがとう。

照明変化。杉宗、由香里はける。

○高山家(現在)

夕食を終えて。光晴と美佳子が座っている。携帯に夢中で二人に会話はない。
美佳子はツムツムをやっている。光晴は由香里とLINE中だ。
美佳子、携帯を食卓に置くと、スクラップを始める。暫くその作業が続くが。

光晴　なあ。

美佳子　なに？

光晴　何やってんだよ、それさ。

美佳子　スクラップ。

光晴　やめろよ。

美佳子　何を？

光晴　だから、そのスクラップだよ。

美佳子　なんで？

楽しそうにスクラップをしていく美佳子。
切った写真を貼って、そして再び雑誌を切っている。

美佳子　いい写真よ。よく撮れてるわ。ほら。

美佳子、写真を見せる。
光晴、無言でスクラップブックを取り上げると、床に放り捨てる。
床にぐしゃっと落ちているスクラップブックはまるで動物の死骸のように横たわっている。

美佳子　なにするのよ。…貴方が撮った写真なのに。
光晴　俺はやめろって言ったんだ。何なんだよ、お前さぁ。
美佳子　泣かないでよ。
光晴　泣かねぇよ。

光晴、やりすぎを認識したものの自分では拾いにはいかない。いけない。くだらない男の意地だ。美佳子、床に落ちているスクラップを拾い上げる。

光晴　嫌なんだよ。俺が撮ったって、そんな写真。…

美佳子、大事そうにスクラップブックを抱える。

美佳子　そんな写真、なんて言わないでよ。お願いだから。

光晴、美佳子を見る。表情は分からないが肩が震えている。

光晴　……ごめん。…

光晴、椅子に座り、何気なくテレビを点ける。
SFテレビのニュースの音。

光晴　あ、この公園。ほら、結婚前に何回か行った所じゃないか？

光晴、美佳子を見遣る。

光晴　……久しぶりに行ってみたりする？　この公園。ほらここからなら二駅ぐらい行った所だろ。近いし。明日は雨降らないみたいだし。あ、でもこのお天気お姉さん外すからな。ってお姉さんが予報しているわけじゃないか。

無意識に多弁になっていく光晴。空気は変えられない。

光晴　ほら、明日にでもさ。思ったら吉日ってやつだよ。久しぶりにタマゴサンド作ってよ。バスケットに入れてさ、ピクニックみたいにさ。ね？

美佳子、はける。

光晴、美佳子を追う。はけない。

光晴　明日。明日行くから。

なのに雨音。

光晴、窓の外に目を遣り。

光晴　雨か。

暗転。雨音激しくなっていく。光晴はけ。

○事務所（過去）

ミカコ、杉宗と対立している。

ミカコ　突然とかじゃ何でもないんです。ずっと考えてたんです。

杉宗　このことはお母様も知っているの？

ミカコ　お母さんはもう関係ないじゃないですか？　私、もう子役じゃないです。

杉宗　だけどさ。辞めたいって突然言われてもねぇ。

ミカコ　私、ユカリちゃんみたいに才能ないし、このままやっていても２０歳を前にして消えていくじゃないですか？

杉宗　消えていくじゃないですかって、言われてもさ。はい、そうです、なんて言えないでしょ。それ言ったらどんな子にだってその可能性はあるよ。

ミカコ　言えないってことは思ってるってことですよね。

杉宗　違うよ。思ってもいないよ。どうしてそうネガティブに考えるかな。これからだろう、ミカコちゃんだってさ。

ミカコ　でもマネージャーはユカリちゃんの現場ばかりついていくじゃないですか。私だけの現場に来たの、最後はいつでしたっけ？

杉宗　それはさ、この事務所のマネージャーの人数を見ればわかると思うけれど、全タレントの現場についていくとか不可能だからさ。

ミカコ　私がいなければその分、もっとユカリちゃんとかの仕事に集中できてよくなるんじゃないですか。事務所としてもメリットでしょ。なんでそんなに私が辞めることに反対なんですか？　理由が分かりません。

杉宗　君がうちのタレントだからさ。俺は、誰にも辞めてもらいたくない。諦めてもらいたくないんだよ。

ミカコ　それは、杉宗さんのエゴです。

杉宗　ミカコちゃん。
ミカコ　失礼します。
杉宗　いや、話はまだ終わってないから。

ミカコ走り去る。間際にユカリとすれ違う。

ユカリ　ミカコ？（杉宗を振り返って）え、どうしたんですか？
杉宗　ミカコちゃんが事務所辞めたいって。何かあった？

ユカリ、ミカコが去って行った方を見て。

ユカリ　私、説得してみます。

ユカリ、はける。

杉宗　頼むよ。

照明変化。杉宗はけ。

○道の何処か（過去）

ミカコ、歩いて入り。暫くするとユカリが走って入り。
足音に振り返るミカコ。暫く見つめ合う二人。

ユカリ　ミカコちゃん。ほんとに辞めるの？
ミカコ　辞めるわ。ダメなことかな。私が決めて私が辞める。もうユカリちゃんも迷惑をかけられることないし万々歳だよね。
ユカリ　それじゃ、私が悪者みたいじゃない。
ミカコ　違う違う。そんなこと言ってないよ。思ってるけど言わないよ。
ユカリ　それもう言ってるから。
ミカコ　私はもう我慢しないの。生きたいように生きるの。生きやすいように生きるの。
ユカリ　それで満足するの。完全燃焼できるの？
ミカコ　完全燃焼しないといけないとかもうしなくていいんだから。私をあなたの物差しで測らないで。
ユカリ　…わかった。でもすぐのすぐってのは無理よ。契約があるんだから。
ミカコ　それは知ってるよ。だから契約を更新しませんって社長には言ったから。

ユカリ　分かってるならいいわ。うん。
ミカコ　やっぱりだ。
ユカリ　え？
ミカコ　やっぱりだなぁって。ユカリちゃんは自分のことだけだから。私を本気で止めようとはしないって思ってたから。前言ってたもんね。自分一人でも前に進むからって。
ユカリ　やめてよ。
ミカコ　ユカリちゃんはこれからもひとりまっすぐ生きていくんだなって思ってる。色んなもの、色んな人を犠牲にしてさ。ねえ、それで満足なんでしょ。そうしないと満足しないんでしょ。
ユカリ　だからさぁ。

光晴入り。

光晴　あれ？

ユカリもミカコも光晴を見る。
表情が変わる二人。

光晴　え、二人と知り合い？
ミカコ　え？

ユカリ、光晴に駆け寄る。ミカコ、ユカリを見る。ミカコスポット。
ユカリ、光晴とスポット。サイレントで話している。二人とも楽しそうだ。
ミカコ、自分の胸倉をつかむ。（何よ、この痛いのはさぁ。）
二人、ミカコの痛みに気付かない。照明変化。

○スタジオ（過去）

照明変化。光晴を先頭に入ってくるユカリとミカコ。
ミカコ、キョロキョロしている。

ユカリ　ミカコ、ココア飲む？
ミカコ　いい。
ユカリ　私、持ってくるね。

ユカリ、はける。

光晴　彼女は自由気ままだなぁ。
ミカコ　あの、ユカリちゃんとは？
光晴　ああ、仕事でね。今じゃこのスタジオのことは俺より知ってるかもしれない。なんてね。
ミカコ　そうなんだ。

ユカリ、ココアを一つ持ってくる。

ユカリ　はい、どうぞ。
光晴　好きなとこに座っていいよ。あれ、自分の分は持ってこなかったのか？
ユカリ　ううん。3個は持ってこれなかったから、あとで自分の分と、光晴さんの分は持ってこようかなって。
光晴　俺の分はいいよ。
ユカリ　そうはいかないわ。いつも貰ってばかりだし。どうせここのはタダだし。
光晴　タダだしは余計な気がするが。
ユカリ　高校生なんて貧乏なんだからね。
光晴　俺が持ってくるからいいって。トイレにも行きたいし。
ユカリ　トイレはねここを出て。
光晴　いや、俺は知ってるから。
ユカリ　ミカコにも説明しているの。
光晴　ああ。ま、ここ出て突き当りを右ね。
ユカリ　なんで言っちゃうのよ。
光晴　長くなりそうだなと思ってさ。

光晴、笑ってはけていく。ユカリ、その方向をずっと眺めている。
ミカコ、（ああ、こいつもか）と思いながらユカリを見ている。

ユカリ　私ね、気づいたよ。貴方が好きな人、彼でしょ？
ミカコ　え？
ユカリ　え、って白々しい。なにそれほんと。
ミカコ　そういうつもりじゃ。
ユカリ　でも残念だったね。彼は私が好きだから。
ミカコ　どういう意味？
ユカリ　私が彼を好きってことは勝てないよね、ミカコは私に。
ミカコ　ああ、そういう意味か。

ユカリ　ね。
ミカコ　あーー、私も気づいちゃった。
ユカリ　なにを？
ミカコ　言うほどのことでもないけれどね。
ユカリ　うん。
ミカコ　（とびっきりの笑顔で）私、あなたのこと嫌いだわ。

雷鳴なのか、雨音なのか、何かしらの大きな短い音が響く。（要検討）
暗転にするかブル転にするか。（要検討）

○ユカリの学校（過去・放課後）

夏希入り。

夏希　ユカリ？　ねえ、ユカリったら。

完全明転。

ユカリ　ん？
夏希　ん？　って聞いてなかったの。放課後マック。
ユカリ　ああ、うん。
夏希　ほらこのまえのアップルパイまだだからねぇ。
ユカリ　うん。覚えてるわよ。
夏希　ほんとぉ？
ユカリ　うん。大丈夫。今日はこれから何も予定ないし。
夏希　じゃ、行こう。
ユカリ　うん。
夏希　ユカリ？
ユカリ　うん？
夏希　大丈夫？　あなたちょっと変よ。
ユカリ　全然。なんでもないから。行こ。

ユカリ、夏希はけ。

○スタジオ（現在）

木田、赤間、由香里がいる。

木田　さすがプロだなぁ。やっぱいい表情するねぇ。あれだけあんなこと言った俺がカメラ撮ってるのにさ。

由香里　褒め言葉として受け取っておくわ。

木田　気が強い女、嫌いじゃない。

赤間　発言には気を付けた方がいいですよ、木田さん。もう二度とお仕事一緒にすることなくなるかもしれませんから。

木田　あー、そういうのってほら、パワハラって言うんじゃないの？

赤間　ご自身の言動がセクハラでしょ。

木田　このぐらいなんだよ。ねぇ。

由香里、苦笑している。

赤間　この前のような発言は冗談でもあれですから。社長には報告してますので。

木田　この前？　なんか言ったかな、俺。

赤間　忘れるぐらいなら言わなければいいのに。

木田　うーん、ホントに思い出せないんだけど。

木田、うんうんと唸って思い出そうとしている。

赤間の電話が鳴る。ちょっと外出ますねというポーズを取って電話に出る。

赤間　はい。赤間です。お世話になっております。え、今夜ですか。（嬉々として）はい、局に伺います。

由香里、ゴシップ誌を手に取って眺める。

木田、背後から近づき由香里に声をかける。

木田　それ、知ってます？

由香里　え？　歌手よね。あまり最近の曲は聴いてないけれど。

木田　違いますよ。それ。写真撮ってる人。

由香里　知らないわ。

木田　そりゃおかしいな。

由香里　え？

木田　貴方が知っていないとおかしい人だから。

由香里　…

木田　高山光晴。そのカメラマンですよ。今はそうやって生活してるんです。俺ね、個人的に興味があるんですよ、問題起こして干されたカメラマンの生きる道ってやつに。
由香里　悪趣味ね。
木田　どうとでも。

由香里、雑誌を閉じて山に戻す。

木田　あれぇ。もういいんですか。折角15年ぶりに彼の写真と再会なんでしょ。
由香里　なんなの。
木田　そんなにヒステリックにならなくてもいいじゃないですか。俺はね、貴方にも興味があるんだ。15年あなたがどういう生き方をしてきたのか大体は知ってるよ。テレビで見てきたからね。

由香里、席を立って離れようとするが手首をつかまれる。

由香里　なに？　放して。
木田　そう。俺はさ、もっと貴方と話したい。
由香里　放して。

木田、掴んでいる手に力をこめる。

由香里　痛い！　そんなに強く掴れたら痛いわ。
木田　でもそのぐらいしないと貴方は俺の手から逃げていくから。だからこうしてないと安心して話せない。
由香里　わかったわ。お話しましょう。だから(離して)。
木田　そうやって俺を騙そうとする。学校に張り込んでたマスコミから「高山カメラマンと抱き合っていた写真、あれは事実なのでしょうか?」って聞かれた15年前のユカリちゃんは何て言ったの？
由香里　それは。
木田　彼が突然抱きついてきて、だっけ？
由香里　ええ、そうね。確かにそう言ったわ。
木田　被害者面して記者の質問に答えてたの覚えてますよ。
由香里　被害者面って、私そんな。
木田　覚えがない？　ご冗談。記者も相手が15歳の女の子だからかどいつもこいつも本気じゃない。最初から腰が引けてるのが視聴者にはまるわかりでしたよ。
由香里　ね、もういいでしょ。

木田　よくないですよ。貴方が事務所や社会やらに守られている中ね、一人のカメラマンはずっと罵詈雑言に耐えてたんですよ。あなたがちゃんと答えないから。

由香里　私だって、ちゃんと答えたかった。でも。

木田　でも？

由香里　光晴さんが全部自分の責任にしろって、そう言ったから。

木田　そう言ったから？　だから全部その言葉通りに押し付けたの？　彼の優しさに付け込んで安全な場所に避難したってことでしょ？

由香里　避難なんてしてない。私だって、

木田　いやぁ、君は避難したんだよ。一人、彼を見捨てて自分の未来を選んだんだ。

思わず手が出てしまう由香里。

張り手を食らって掴んでいた手を放してしまう木田。

木田、頬をさすっている。

由香里　言えるわけがないじゃない。私の気持ちなんて。

赤間入り。その二人の様子から事態を把握しようとしている。

由香里、手をさすってはけようとする。

赤間　由香里さん？

由香里　大丈夫。ちょっと飲み物買ってくるわ。

由香里はける。

木田　俺も冷やすもの持ってくるかな。

木田が動いてはけようとするが、赤間が行く手を遮るように立つ。

木田　あれ。

赤間　うちの由香里に何かしたら私黙ってませんから。

木田　いや、うん。冗談？　そう、冗談だからさぁ。あれ、俺冗談嫌いだったのにおっかしいの。

赤間　冗談で済むことと済まないことぐらいわかるでしょう。大人なんだからあなたは。

木田　だってさぁ。15年経ったからいいでしょ、みたいにどうしても俺には思えちまったからさ。少なからず出てくると思うぜ、俺みたいに考える奴は。

赤間　私や社長はそれでもこの15年をちゃんと目を逸らさずに見てきたファンが理解

して、受け止めてくれるって信じてるんで。
木田　ポジだなぁ。そうか。ま、そうなるといいな。

暗転。木田、赤間はけ。音楽が必要かもしれない(要検討)。

○公園(現在)

明転。時刻は昼過ぎ。平日。バギーでやってきている母親と子供などで溢れている。光晴は木や空を撮ったりしている。暫くして美佳子入り。手にはバスケット。こうやって夫婦揃って出かけるのはいつ以来だろう。

光晴　こっちこっち。

光晴、美佳子にカメラを向ける。
美佳子、困った笑みを浮かべながら歩いてくる。

光晴　そんな困ったように笑うなよ。撮れないじゃないか。

ベンチに座る美佳子を撮る光晴。

美佳子　そんなこと言ったって、撮られるの久しぶりだから。
光晴　そうだっけ？　いつ以来？
美佳子　下手したら新婚旅行？
光晴　それは大袈裟だよ。
美佳子　だって貴方、全然撮ってくれないじゃない。
光晴　こっそり撮ってるんだよ。(あ、っていう顔をするが美佳子には気づかれない)
美佳子　こっそりなんて。そんなの嘘よ。撮られた自覚ないもの、私。
光晴　だからこっそりなんだって。
美佳子　ほんとに？　だったら今度その写真見せてよ。
光晴　いつかね。
美佳子　絶対よ。嘘ついたらハリセンボンだからね。
光晴　あ、ああ。あれ、それ前にも言われたことあったっけ？
美佳子　ハリセンボン？　どうかしら。覚えてないけれど。
光晴　そ。まあ、今日はいっぱい撮るから。
美佳子　風景を撮ってくればいいじゃない。私ここでのんびりしてるから。
光晴　俺は、その、なんだかな。…風景にいるお前を撮りたいんだよ。そういう気分なん

だよ。

美佳子　はぁ？　何言ってんのよ、まったく。

光晴　昔は撮らせてくれたじゃないか。

美佳子　いつの話よ？

光晴　えーと、…いつかだよ。

美佳子　誤魔化した。

光晴がカメラを向けるとバスケットで顔を隠す美佳子。じゃれあっている夫婦。微笑ましいものだ。

光晴　だから撮れないじゃん。

美佳子　こっそり撮ればいいじゃない、いつも撮ってるみたいに？

光晴　わかったわかった。ま、折角だから風景でも撮ってくるさ。

美佳子　そうして。私ここでのんびりしてるから。

美佳子、ベンチに座る。

照明変化。美佳子のいる場所と光晴がいる場所が異なるように。

光晴は樹木や植物、空を引き続き撮影する

美佳子、暫くしてレジャーシートを敷き始める。

光晴、遠くから美佳子を確認するとカメラを向ける。

美佳子が電話に出ている。

光晴、「君は誰と話しているんだ？」木に隠れて移動しつつ、美佳子を撮る光晴。

光晴の電話が鳴る。SE は LINE 電話かもしれない。

光晴　はい、高山です。あ、君か。明日の夜？　多分何もないと思うけど、なに？　写真集の撮影終了祝い？　なんだそれ（苦笑する光晴）。わかったよ、じゃあ、明日。

電話を切る光晴。美佳子を見ると彼女も電話を切っている。光晴、美佳子にカメラを向け、シャッターを切る。照明変化。光晴、美佳子はける。

○スタジオ（現在）

木田、頬を冷やして椅子に座っている。夜。一人。そこに薫入り。

薫　歯でも痛いの？

木田　違う。

薫　じゃあ。
木田　(答えは出ないと思ったので)由香里さんに殴られた。
薫　なんかやったんでしょ。…私のバージン奪っといてさ、あと何人に手を出そうとするの？
木田　これはさもう病気みたいなもんだから。
薫　治るといいね。
木田　多分治らないよ。でも今日は違うからね。俺の名誉のためにも言っておくけど、手を出したわけじゃないからさ。
薫　じゃあ、何したの？
木田　ちょっとお話を。
薫　お話…
木田　15年前の、ね。
薫　ああ。15年前にあったことと義朝くんはどういう関係があるの？
木田　直接は関係ないよ。ただ、俺は。

木田、そう言いながらカメラを手に取る。

薫　そのカメラ。
木田　ん？
薫　他のカメラよりよく使ってるよね、義朝くん。誰かからのプレゼント？
木田　そうだな。
薫　女？
木田　違う。おっさん。ってまあ、ほとんど変わらないか。
薫　そのおっさんは義朝くんにとってどんな人？
木田　俺がこの業界に入っていろいろと教えてくれた恩人。俺、カメラ始めたの遅かったから、だから年齢も年齢で、みんな俺より年下でさ。そんなやつから教わったりさ、こき使われるのめちゃくちゃ嫌でさ。
薫　ああ、そういうところあるよね。
木田　だから自分と同い年ぐらいのカメラマンの彼のとこに弟子入りしてさ。知ってるかい？　カメラって意外と高いんだよ。
薫　知ってるよ。
木田　俺、金もなかったし、カメラも持ってなかったしで、その人になんか使わなくなったやつでもいいからくれって言ってさ。めちゃくちゃ厚かましいお願いしてさ。
薫　うん。
木田　そしたらこれくれた。
薫　使ってなかったんだ。

木田　いや、めちゃくちゃいつも使ってるやつ。使ってないやつだと整備してないからって言われて。
薫　いい人ね。
木田　すっげぇいい人。だから15年前の出来事が信用できなくて。俺には悪ぃって言うだけでなんも言ってくれなかったし。
薫　心配させたくなかったんだろうね。
木田　だろうなぁ。だから、この機会逃したら絶対真相なんて聞けなくなると思ってさ。由香里さんに聞いちった。
薫　で、殴られたんだ。
木田　そ。
薫　満足した？
木田　全然。なんか「もやもや」が「もや」ぐらいにはなったかな。
薫　なら殴られ損はしてないからいいんじゃない。ほら。
木田　え？
薫　氷、取り替えてきてあげる。
木田　優しいね。
薫　本命にしてくれる？
木田　断る。
薫　即決(不図笑ってしまう)
木田　だって遊べなくなるじゃん。
薫　その分、私と遊べば？
木田　そういうことじゃないじゃん。痛たたたた。

そっとはたかれた頬に触れる薫。

薫　いたいのいたいのとんでけー。お母さんとかにやってもらわなかった？　子供の頃とか。
木田　俺、子供じゃないし。薫より大人だし。
薫　だったらいいじゃない。
木田　なにが？
薫　おとなしくしていればってこと。
木田　俺、遊びまわるのやめないけど。
薫　そう。
木田　薫のこと、本命とか言わないけど。
薫　そう。
木田　なんだよ。まるで(俺が子供みたいじゃないか)

薫　　そうだね。

今はただその手の温もりが、その頬の温もりだけが二人にとっての世界。短い時間だとしても。終わりがあるとしても。照明変化。木田、薫はけ。

○高山家(現在)

誰もいない舞台。

美佳子(声)　　タオル、ここに置いておくね。

光晴(声)　　ああ。

美佳子入り。そして光晴のカメラが食卓に乗っているのを目にし、写真をこっそり見る。今日撮った写真が何枚も続く。風景。風景。……美佳子。

美佳子　やだ。私ったら、こんな表情して。また、もう。なんでこんな写真しかないの。

美佳子が知らない美佳子の写真が出てくる。

美佳子　えーー、いつ撮ったのよ、これ。ホントに隠し撮りしてたんだ。あ、こっそりランチ先に食べた瞬間まで。

美佳子、恥ずかしくてもじもじしている。

美佳子　あとは風景ばかりね……

写真が切り替わり、今日じゃない写真が出てくる。それを見て表情が変わる美佳子。

美佳子　…なんでよ……なんでまた……由香里……

雨が街に降り始め、遠くで雷が鳴った。暗転。

○外、あるいは中。いつかのどこか(過去)

雨は激しく。街は雨音の中に沈む。照明は暗く。時折雷が光る。

雨に濡れたユカリ。それを追ってきたミカコ。

ミカコ、ユカリの肩を思い切り掴んで振り向かせる。

ミカコ　なんでよ。

ユカリ　なにが？　痛いんだけど。

ミカコ　ふざけないで。

ユカリ　ふざけてないわ。

ミカコ　ふざけてるわよ。なんで嘘が言えるの？

ユカリ　嘘じゃないし。

ミカコ　嘘。ユカリちゃんは嘘つきよ。

ユカリ、ミカコが掴んでいた手から逃れる。

ユカリ、肩をさすっている。

ユカリ　あのさ、光晴さんはあなたのものじゃないでしょ？

ミカコ　それは、でも。私が好きだって知ってるのに。

ユカリ　だからなに。あなたが好きな人は私は好きになったらいけないの？

ミカコ　でも。

ユカリ　私が抜け駆けした、そう思ってるの。そう思いたいのね。

ミカコ　違う。

ユカリ　違わない。貴方が何もしていない、しなかった間に私が彼との間を詰めたことが気に入らないんでしょ。自分がうすのろだった責任を私に転嫁してるだけよ、それ。

ミカコ　違う…

ミカコ、俯いて、じっと痛みに耐えている。表情を見られたくない。ユカリを見たくない。この場にいたくない。でも逃げたくない。

ユカリ　…惨めね。ねぇ、ミカコちゃん。

ミカコ、俯いたまま聞いている。

ユカリ　私、彼に抱かれたわ。

ミカコ、顔を上げる。（なんで私はこの子に勝てないの）

雨は激しくなり、闇が彼女たちを覆い隠す。暗転。

○事務所（現在）

明転すると杉宗、由香里、赤間板付き。
赤間はソファに横になって「魔王」を抱えて寝息を立てている。寝相が悪い。
由香里、写真を撮る。

由香里　すっかり寝てるわ。
杉宗　最近忙しかったからな。そうそう、彼女のお陰で来年の大河、決まったから。
由香里　え？　このタイミングで言う事？
杉宗　流れ的にそうかなと。
由香里　でもありがとう。私、もっと今まで以上に頑張るから。
杉宗　ああ。撮影も色々あったが終わってよかったな。あとは商品になって書店に並ぶのを待つだけか。…由香里。
由香里　はい？
杉宗　一応写真集の宣伝でマスコミの前に立つことになる。
由香里　でしょうね。
杉宗　大丈夫か？
由香里　想定内よ。どんなこと言われても耐えられるし、答えてみせるわ。木田さんの件はいい予行演習になったわ。
杉宗　君は強いな。

由香里、笑うのみで杉宗のその言葉には答えない。
杉宗、自分のグラスと由香里のグラスにワインを注ぐ。

杉宗　もう一度乾杯しよう。
由香里　何度でも。
杉宗　写真集撮影終了を祝して。
由香里　祝して。
杉宗　そしてこれからの今津由香里の将来の成功を願って。乾杯。
由香里　乾杯。
赤間　由香里さん！(二人赤間を見る)私が守ります zzzzz
由香里　寝言。

由香里、赤間の寝顔をまた撮る。ブル転。全員はけ。

○道の何処か(過去)

明転。光晴とユカリ。夕日が街を染めている。
二人に会話はない。いつもと違ってぎこちない二人。
光晴、コーヒーを啜る。ユカリを見ないようにしている。

ユカリ　ごめんなさい。でも私。
光晴　いや、うん。きっと背伸びしたいだけじゃないかな。
ユカリ　それは違うわ。私真剣に光晴さんのこと。
光晴　でもさ、年齢ってあるじゃない。まずいよ、それは。
ユカリ　うん。
光晴　女優になるんだろう。なれるからさ、君は。
ユカリ　そんなに私って魅力ないのかな。子供ですか？

光晴、黙っている。ユカリ、黙っている。

ユカリ　抱いてくれませんか？

光晴、ユカリを見る。ユカリ、俯いている。精一杯の強がり、精一杯の背伸びが見て取れる。光晴、やれやれという想いを抱きつつもそっとユカリを抱きしめる。

光晴　今はこれで勘弁な。10年、いや、15年経ったら、その時は抱いてやるよ。
ユカリ　それまで、私、この温もりを覚えていられるかしら。15年後の私はあなたをまだ好きでいるかしら。
光晴　それは15年先にいる君に聞いてくれ。…さ、送ってくよ。
ユカリ　ありがとう。

光晴、ユカリはける。そして誰もいなくなる舞台。溶暗。そこへカメラを持った無表情のミカコが入った段階で完全暗転。※次のミカコの言葉は暗闇の中で呟かれる。

ミカコ　嘘つき。

○記者会見(過去)

別の場所で同時に展開される記者会見。
片方には光晴のみ。片方には杉宗。
記者たちが2人を放射線状に囲んでいるイメージ。

※記者役が必要なわけではない。舞台上には二人。

記者　実際問題どうなんでしょうか。抱きついたんでしょうか。
光晴・杉宗　　写真のとおりです。
記者　もう少し詳しいその時の状況を話してほしいんですが。
光晴　私が抱きつきました。それだけです。
記者　それだけ？　ユカリさんから抱いてとか言われたみたいなことはないと。
杉宗　誰がそんなことを。事実無根です。
記者　この写真を撮った人がですね、ユカリさんから誘ったと言っているようなんですけど。
光晴　聞き間違いではないでしょうか。近くに人影もありませんでしたし。
記者　もう一つ。これからどうされるんですか？
杉宗　ユカリはこれからも芸能業界で仕事をしたいと申しております。我々事務所の人間はその気持ちを支えていきたい、そう思っています。
記者　でも仕事なんてあると思いますか？
杉宗　あるかないかは私にも分かりません。使って頂けるならなんでもやる、そう本人は言っております。続けていくことで失った信頼を取り戻したいと。
記者　最後にもう一つ。なんで抱きしめたんですか？

光晴、黙っている。

光晴　それは。
記者　すみません。聞こえません。
光晴　申し訳ないことをしたと思っております。
記者　違う。私はそんなことを聞いていない。視聴者だってそんな謝罪が聞きたくてテレビを見ているんじゃないんだ。高山さん。高山さん。事実をちゃんとカメラに向いて話して下さい！

杉宗はけていく。光晴。深く頭を下げるほかない。

○学校の廊下(過去)

朝の爽やかな空気。世界は生まれ変わったように神は別の日をどんな人間にも平等に与えられる。移動教室なのか教科書などを持ってユカリ入り。夏希、その後ろから入り。わざとユカリの肩に接触する。教科書を落とすユカリ。その教科書を蹴り飛ばす夏希。

夏希　あ、ごめんごめん。
ユカリ　大丈夫。うん。
教科書を拾い上げようとしゃがみこむユカリ。
夏希　そ。
夏希立ち去ろうとするがふと立ち止まり。間。
夏希　不潔ね。
夏希はけ。一人になるユカリ。その表情は客席からは見えない。しゃがみこんだまま溶暗。

○道の何処か(過去)

街は今日も雨。いつ晴れるともしれない。傘を差した人たちが流れるように歩いている。光晴、傘もささずに入り。手にはウイスキーのボトル。酔っているようだ。一抹の希望を抱いてカメラの仕事を探したがこうもダメかと現実を突きつけられ、少しの希望も持っていない時期である。危なっかしい足取りの光晴。人とぶつかる。車の走行音。クラクションの音。に引き寄せられるように車道へ一歩また一歩と進む。※舞台上の動きとしては客席に向かってまっすぐ進むイメージ。
傘を持った人の群れから少女が飛び出す。SE 急ブレーキ音。少女とともに尻餅をつく光晴。光晴、その少女を見遣る。ミカコは息を切らして、震える手で彼の服を掴んでいた。罪も恨みも全てが浄化されることを祈りつつ暗転。雨音にすべては飲み込まれる。光晴、ミカコはけ。

○高山家(現在)

パジャマの美佳子。電話をしている。目の前には夕食(お盆に乗っており、お皿にはラップがかかっている)。相手は光晴。
美佳子　今日も遅いのね。うん。大丈夫。先に寝るから。(戸締りしろよなどの言葉に)ええ、わかってるわ。おやすみなさい。

電話を切る美佳子。そっと携帯を置く。夕食を見つめたかと思うと、お盆ごと台所に運んでいく。刹那、皿が割れる音が響く。無音。そこへ携帯が鳴る。一度切れるが再び鳴る。美佳子入り。携帯を取り上げ、電話に出る。

美佳子　はい。……私に？　会いたいの？

窓の外、雨を眺める美佳子。少しだけ長い葛藤を経て。

美佳子　わかった。ええ、会ってもいいわ。

自分が今誰と何を話して、私の口がどんな言葉を紡いでしまったのか理解していない美佳子。麻酔をされているようなふわふわした感覚の中に。サイレントで電話の芝居。美佳子はけ。暗転。少々長めでもいい。

○記者会見前の楽屋(現在)

赤間と由香里板付き。

赤間　ようやく大河ですよ。由香里さん。緊張しますね。

由香里　やだ。なんで貴方が緊張するのよ。

赤間　あ、確かに。でも私も緊張しますよ。はあ、この寝不足で出来たくまも報われたと喜んでくれています。そうそう。私なんかテレビに映らないのに田舎の両親に電話しちゃいましたよ。私が担当してる女優が大河出演するんだって報告しちゃいましたよ。

由香里　大げさ。たかが大河でしょ。

赤間　発言気をつけて下さい！　どこにパパラッチが潜んでいるかわかりませんから。

由香里　まあ、そうは言ってもやはり気負うところはあるわ。

赤間　そうですよね。紅白に初めて出たアーティストぐらいには緊張して頂かないと私も頑張った甲斐がありません。

由香里　ありがとう。

赤間　そろそろですかね。

由香里　そうね。

赤間　行ってらっしゃい。私、会見場の端っこで見守ってますから。母親のような目で由香里さんを見守ってますから。

由香里　じゃ、行ってくるわ。

由香里はけで照明変化。赤間はけ。誰もいなくなった段階で街中の SE、車の走行音 SE に乗り替わる。

○曲がり角(現在)

ラブホテルの入口を見張っている男二人。光晴と探偵の蓑下。
蓑下は傘を差し、光晴はレインコート。

蓑下　さっぶ。
光晴　ホッカイロ使います？
蓑下　え、なんで自分だけ？　使うにきまってるじゃないのさ。
光晴　妻がね、今日は寒くなるからって出かけに持たせてくれたんですよ。
蓑下　独り身である私へのあてつけですか？
光晴　いや。事実を言っただけなんですけど。
蓑下　光晴くんさ、不倫をしなさい。もうしてくださいってお願いしちゃいますから。
光晴　なんですか、それ。
蓑下　俺だって昔は惚れた女数知れず。あっちにふらふらこっちにふらふらしたもんよ。
光晴　昔はって。蓑下さん、俺より年下ですよね？
蓑下　それはそうだけどさ、今より過去は全て昔さ。昨日も一昨日も。カメラ！

光晴、シャッターを切る。

蓑下　違うかぁ。寒いしもうよくな(いか？)
光晴　よくないですね。ええ。
蓑下　うちの所員より厳しいよね、光晴くんは。あ。
光晴　…
蓑下　あ。
光晴　なんですか？
蓑下　いや、ちょっとトイレとかこの辺にないかなと。
光晴　はぁ？
蓑下　あのホテル貸してくれないかな、トイレだけでも。
光晴　それはちょっとまずいんじゃ。この道戻ったところにコンビニありましたけど。
蓑下　うーん、遠い？
光晴　それなりに。
蓑下　もう出てくるよね。出てくるでしょ。

光晴　さぁ。

蓑下　じゃあもうここでするからあっち向いてて。

光晴　やめてくださいよ。え、ちょ、出さないでくださいって。

蓑下　我慢はよくないよ。

光晴　わかりました。俺やっとくんでトイレ行ってきてください。

蓑下　お、その言葉を待ってたよ。俺から言えないものね、それ。じゃああとは頼むよ。

蓑下、はける。光晴、誰かが出てくるのに気づきカメラを向ける。

ポケットから写真を取り出し比べる。ターゲットだ。シャッターを切る。

光晴　女、さっさと出てこい。2人並んだ画じゃねぇと意味ねぇんだって。

独り言つ光晴。カメラを構え直す。写真はポケットにしまってもいい。

女が出てくる。シャッターを切る光晴。

光晴　傘、邪魔だな。こっち向け。…

光晴の願い通じて一瞬、浮気女が彼の方を向いた。光晴、カメラを持つ手を下ろす。

光晴　美佳子……

光晴、逡巡するが、美佳子と男(傘が邪魔で顔は見えない)が立ち去ろうとするのに気づいて、再びカメラを二人に向ける。無意識にシャッターを切る光晴。その二人を追っていこうとすると反対側から由香里入り。照明はスポットでもいい。無数のシャッターが切られる。視線こっちにと言われているのかにこやかな表情でカメラに目を向ける由香里。美佳子たちがはけていく。何かに気づいたように立ち止まる美佳子。雨がやんだ。暗転。

了